II. 遺跡調査の概要

鎌倉街道周辺遺跡（かまくらかいどうしゅうへん）

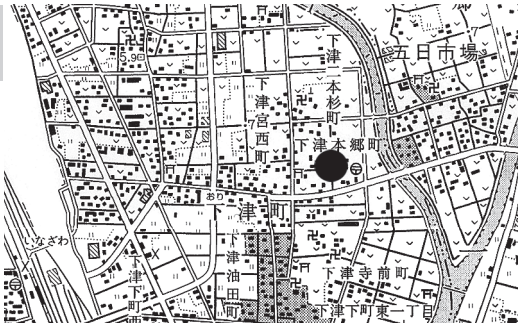
所　在　地　稲沢市下津本郷町・下津宮西町
（北緯35度15分19秒 東経136度49分52秒）

調 査 理 由　県道名古屋豊山稲沢線建設

調 査 期 間　平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月

調 査 面 積　8,000㎡

担　当　者　樋上　昇・加藤雅士・奥野絵美



調査地点（1/2.5万「一宮」）

調査の経過　県道名古屋豊山線建設に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。調査対象地は南北に約 25 ～ 30m、東西に約 500 m と細長であるため、西から A・B・C・D・E の 5 調査区を設定した。各調査区は現有道路や排土の事情から、さらに 2 ～ 4 に細分割して調査をおこなった。

立地と環境　本遺跡は青木川右岸に形成された標高 6 ～ 7 mの自然堤防上にあり、京鎌倉往還道と関連施設が想定される南北約 3 ｋm、東西約 1.5 ｋmの範囲が指定されている。調査区の西方約 300 mには下津新町遺跡があり、古墳～近世の遺構が確認されている。同じく北方約 500 mには尾張の守護所である下津城があり、複数の塀を有する城郭であったことが確認されている。

調査の概要　調査地は、事業着手直前まで一部は宅地となっていたが、大部分は田畑として利用されており、中世の遺構が比較的良好に残っていた。出土する遺物は、ほぼ中世に限定されるようだ。

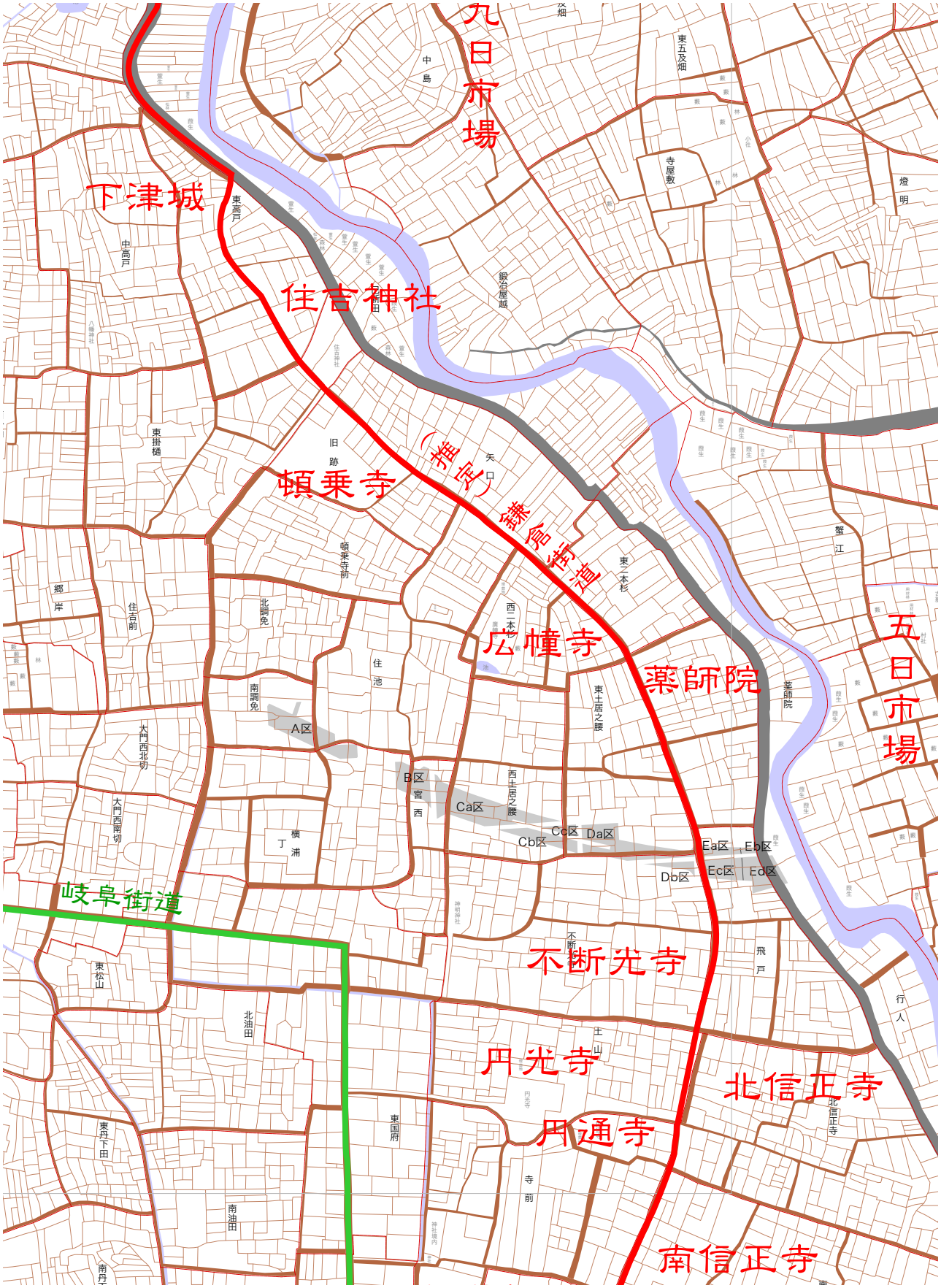
A 区では 2 面調査をおこなった。第 1 面が 12・13 世紀、第 2 面が 14・15 世紀を中心とする時期であり、各面で正方位を有する溝を数条検出している。調査区内では完結していないが、方形の区画溝であったと考えられ、墓の可能性がある隅丸長方の土坑を多く検出していることから宅地等として利用されていた可能性がある。またこれらの溝は、明治期の地籍図にみる地籍の境界線とほぼ一致しており、土地の変遷を考える上でも興味深い。

B 区は調査区の約 1 ／ 5 が飛び石状に攪乱を受けており、遺構の遺存状況が良好ではなかったが、小土坑のほか、やはり区画溝と考えられる南北の溝を 2 条検出している。

C 区は西から Ca・Cc・Cb 区に分割して調査をおこなった。Ca 区西端と Cb 区東端付近で、南北方向の大溝を確認した。溝間の距離は約 120m であり、地籍図からみて、一辺が 100 ～ 120m の方形区画を有する居館となる可能性が高い。内部では、多数の柱穴・土坑と、居館内を細分する区画溝が認められる。

D 区は現有道路を挟んで a・b 区に細分した。Db 区ついては E 区とあわせて記す。Da 区では 3 面調査をおこなった。第 1 ・ 2 面では土器廃棄土坑を多く検出した。いずれも掘形が約 1 ～ 1.5m の円形基調の土坑に、15 世紀を中心とする土師皿類が数十個まとまった状況で検出した。饗宴等に伴う廃棄とみられ、本調査区の性格を考えるうえの手がかりとなることに加え、尾張の中世土師器編年を考えるうえでも今後、重要な一括資料になるだろう。地山である第 3 面では東西正方位の溝が繰り返し掘りなおされている状況を確認した。これも区画溝と考えられ、明治の地籍図にみる境界線とほぼ一致する。

E 区および Db 区では南北に伸びる土手状の高まりを検出した。この高まりは、炭や土器細片が多く混じる整地土で作られており、高さは約 0.4m ある。E 区のものは東西幅が約 15m。長さは南北に約 30m を確認しており、さらに調査区外へ続いている。土手の



発掘調査区と周辺の地籍図（1:50,000）

東の落ち際には平行する南北溝が掘られているが、西の落ち際には溝を確認していない。Db 区でも同様の高まりがあり、西の落ち際に溝が掘られるが、東側は調査区外にあり不明である。これら２つの関係は、間にある現有道路のためも不明な点もあるが、Ec 区では土手として完結していることから、２条の土手と考えられる。地籍図等から復原すると、高まりのある地点は鎌倉街道が想定される位置にあることから、これらが道路遺構であった可能性が強く疑われる。土手を形成する土の下層には、やはり整地とみられる層があり、木製でそれぞれ方形と円形の枠をもつ井戸を計３基検出している。また下層の断面観察では、河川の流跡を確認したほか、古い段階の整地土が河川の離水に伴う浸食等による影響を受けている様子を確認しており、旧青木川と土地利用のありかたについての知見を得た。

ま と め　まず調査地では、ほぼ中世に限定できる遺構・遺物が比較的良好に残存していることを確認し、そこでは整地等の大規模な造成がおこなわれていたことが明らかになった。東



A区上面全景（西から）



A区下面全景（西から）



A区上面薬研掘りの南北溝（北より）



A区下面東西方向の大溝群（東より）

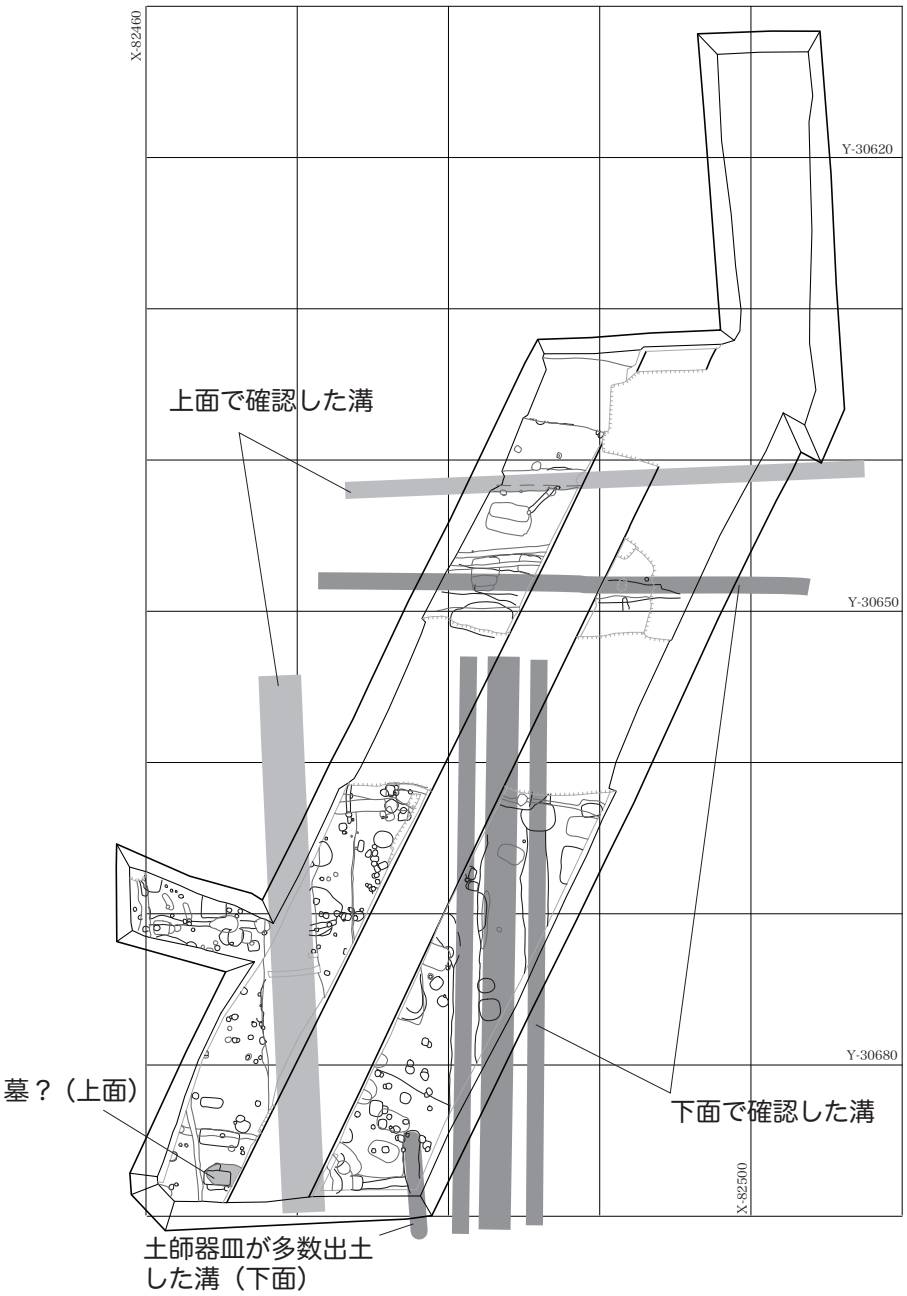


A区上面墓の可能性の高い土坑（南西から）

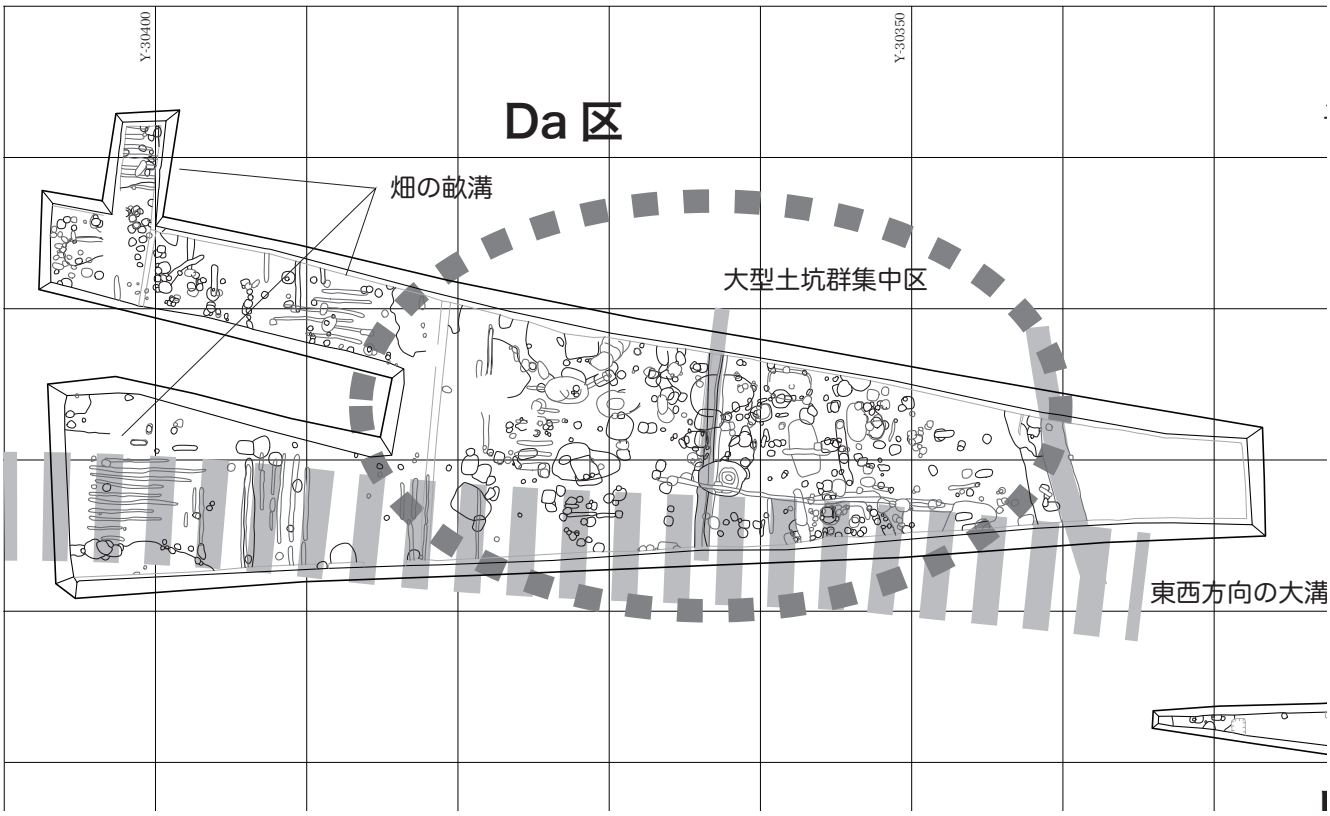


A区下面土師器皿が多数出土した溝（東から）

西に長い調査区では遺構に加え、山茶碗の出土が多いA区に対して土師器の皿や煮炊具の多いD区など地点差が認められ、それぞれで土地利用の性格が異なった可能性が強い。そこにはDb・E区の土手状の高まりが関連を疑われる、鎌倉街道との距離に関係があるとみられ、時期的変遷も踏まえて検討してゆく必要があるとともに、今後の周辺での調査ではより精度の高い調査が求められる。　（加藤雅士・樋上　昇）



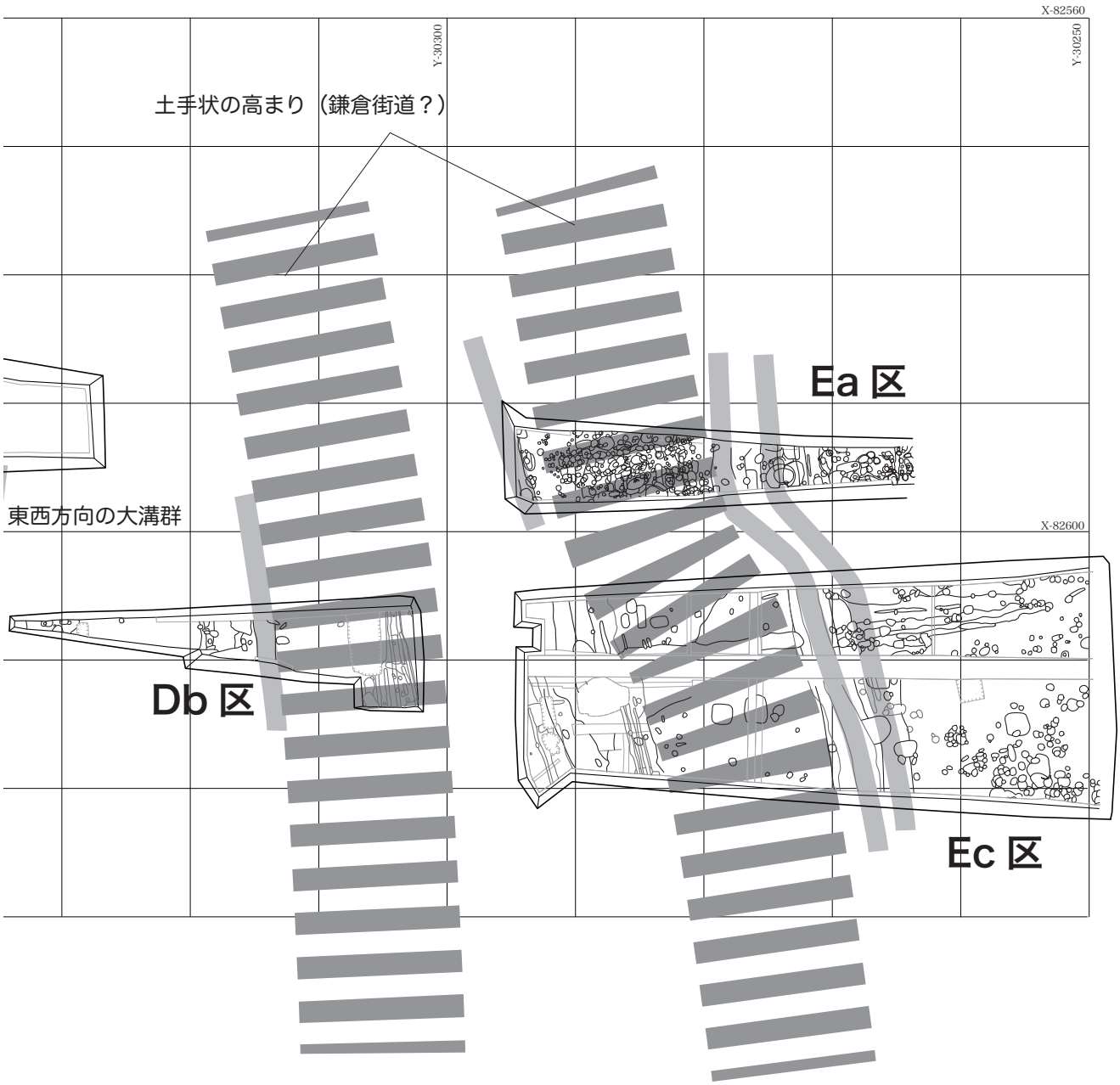
A区遺構図（1:500）



D･E区1・2面遺構図西側（1:500）



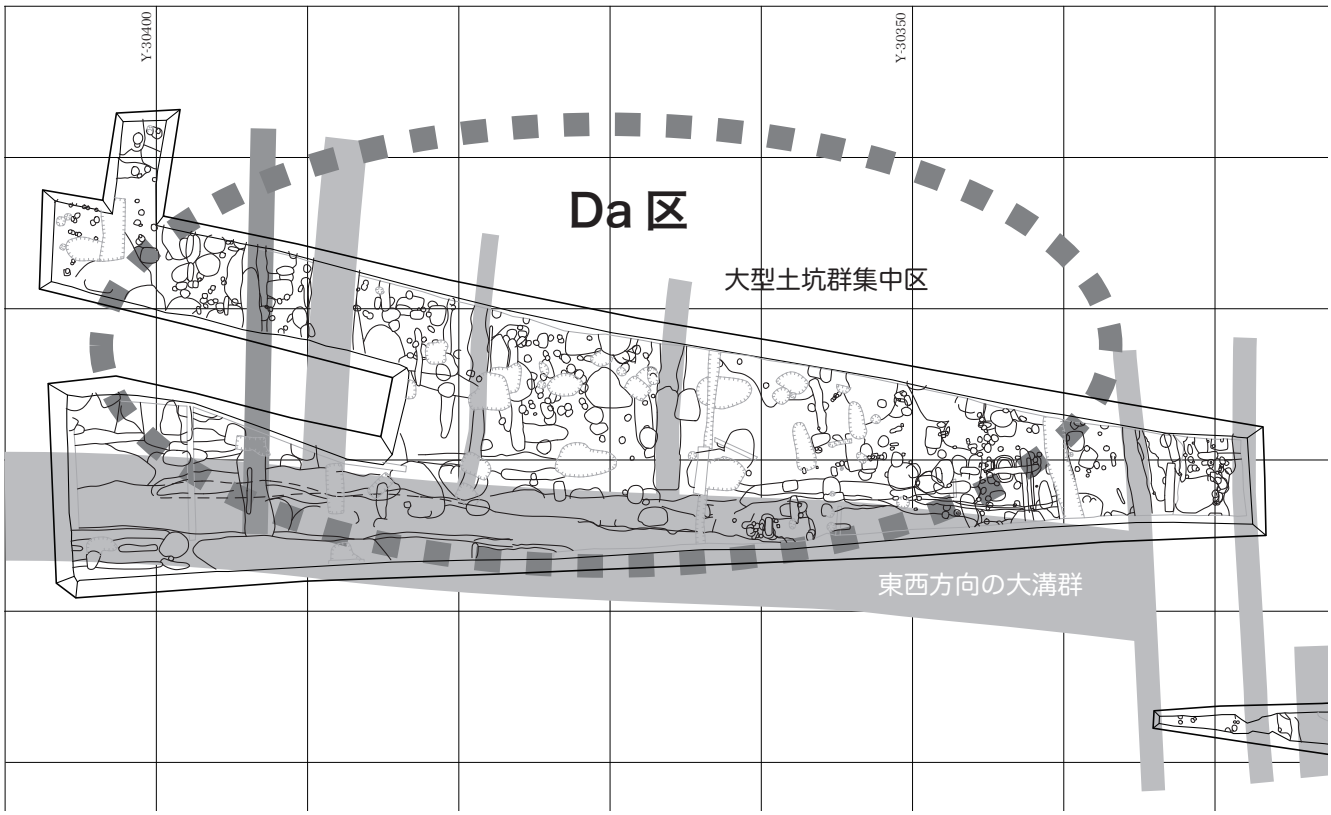
D区上面全景（東から）



D･E区1・2面遺構図東側（1:500）



Ec区土手状の高まり（南から）



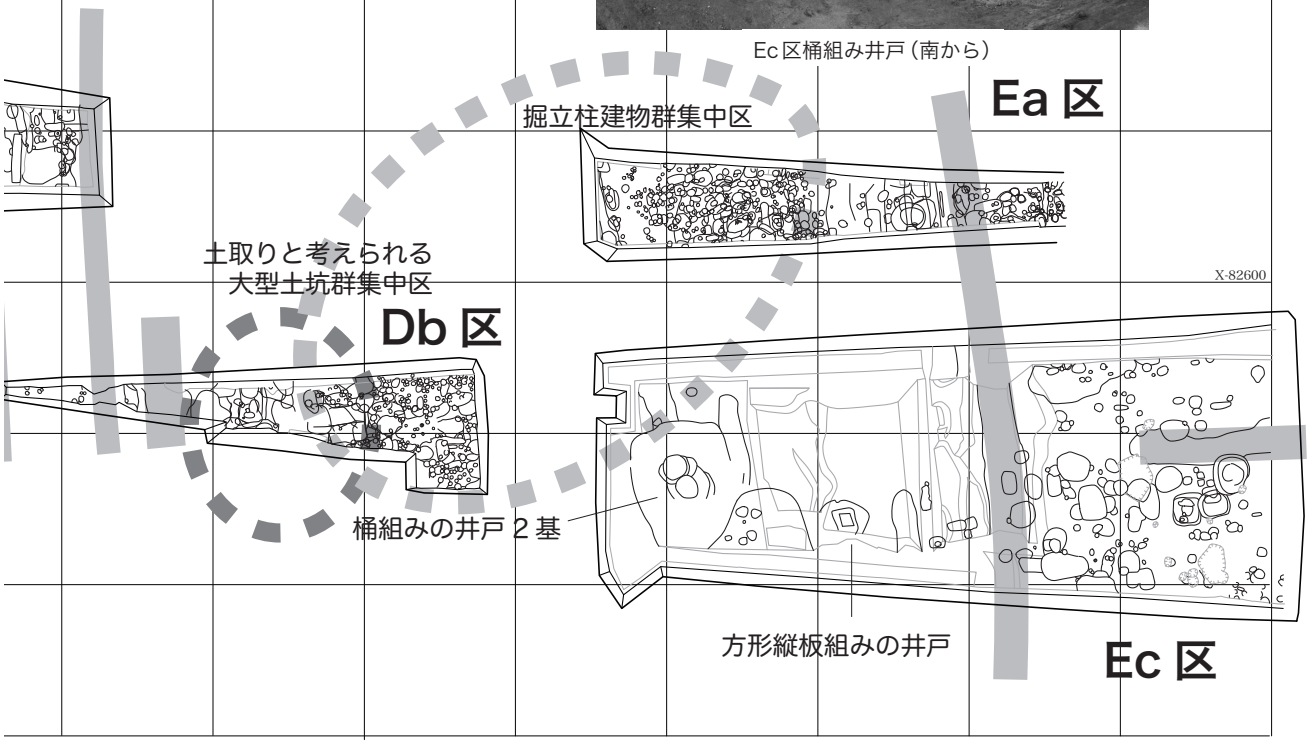
D･E区3面遺構図西側（1:500）



D区下面全景（東から）



Ec区桶組み井戸（南から）



D･E区3面遺構図東側（1:500）



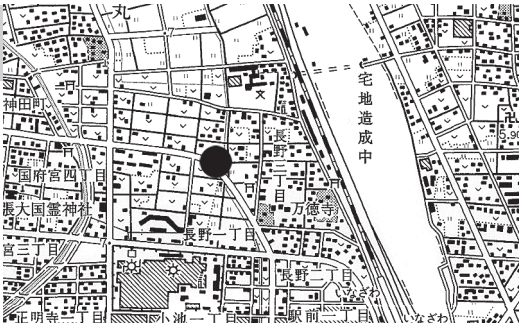
E区下面全景（東から）



Ec区方形縦板組み井戸（北から）

塔の越（とうのこし）遺跡

所　在　地　稲沢市長野3丁目
（北緯35度15分28秒　東経136度48分49秒）
調 査 理 由　都市再生推進事業3・3・14号稲沢西春線
調 査 期 間　平成22年4月～平成22年5月
調 査 面 積　80㎡
担　当　者　石黒立人

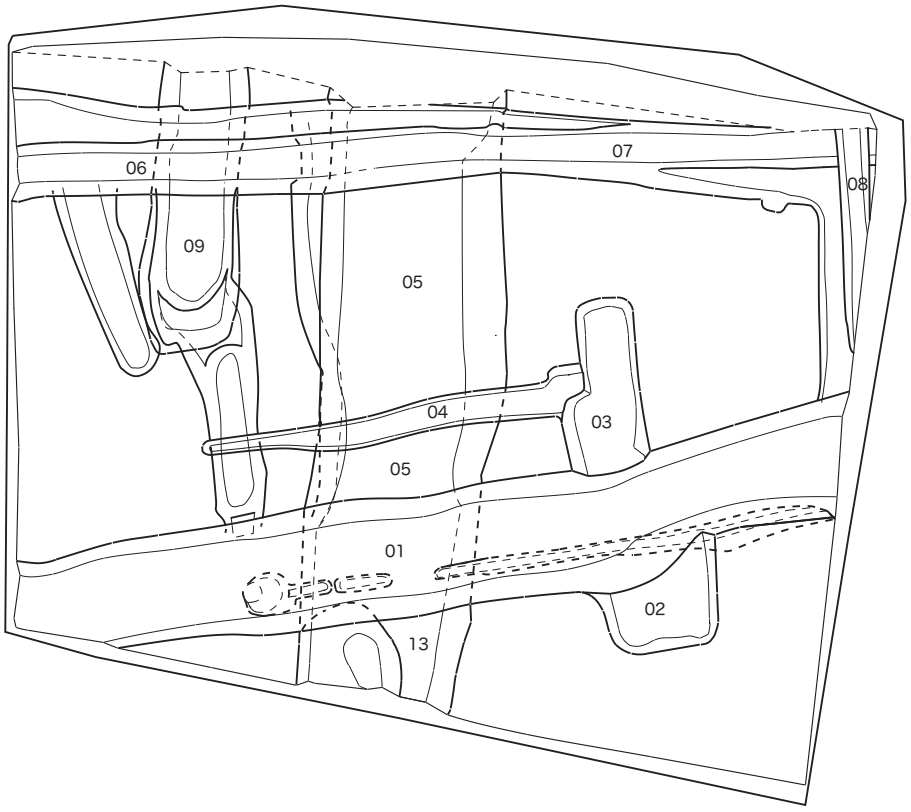


調査地点（1/2.5万「一宮」）

調査の経過　塔の越遺跡の発掘調査は、都市計画道路稲沢西春線の建設に伴う事前調査として、愛知県建設部都市整備課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。

立地と環境　本遺跡は稲沢市の東部、三宅川左岸の自然堤防状に立地する。東には長野北浦遺跡が所在する。

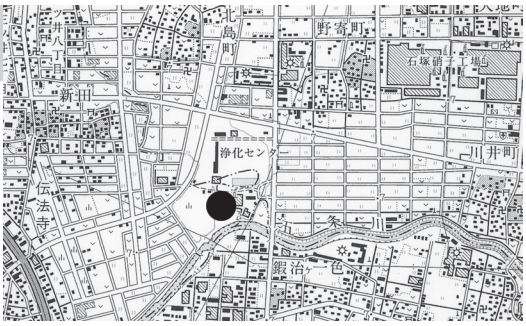
調査の概要　本年度の調査区は平成 19 年度調査区の南東端に位置している。上面は中世から近世にかけての溝、下面では古墳時代前期の溝を検出した。いずれも前回調査の続きであり、土器等が出土した。（石黒立人）



塔の越遺跡10区プラン（1:100）

伝法寺野田遺跡（でんぽうじのだ）

所　在　地　一宮市丹陽町伝法寺地内
（北緯35 度15 分46 秒 東経136 度50 分39 秒）
調 査 理 由　五条川右岸流域下水道事業焼却施設建設
調 査 期 間　平成22 年10 月～平成22 年12 月
調 査 面 積　1200 ㎡
担　当　者　樋上　昇・奥野絵美



調査地点（1/2.5万「一宮」

調査の経過　本遺跡の発掘調査は、焼却施設建設事業にかかわる工事の事前調査として、建設部下水道課から愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。前調査区（06 区）の北側、約1200 ㎡を調査区として設定し、発掘調査を行った。

立地と環境　伝法寺野田遺跡は五条川右岸に位置し、自然堤防上から河川に向かっての傾斜地に立地する。調査地点の標高は7m 前後であるが、表土からおおよそ2m 程度の深さまで近代に盛土がされている。過去の発掘調査成果をみると、本年度の調査区（00 区）の西側に位置する99 区では、環濠とも認識できる溝と竪穴状の遺構が検出されている。また、本調査区の南側に位置する06 区では、弥生時代～古代にかけての水田遺構が多く認められている。

調査の概要　西側の西および南セクションで、弥生時代～近世にかけての遺物包含層が確認できた。層序は、過去の発掘調査で得られた伝法寺野田遺跡の基本層序（ 平成18 年度刊行　伝法寺野田遺跡報告書参照）と一致するものである。そのため、古代以降の検出面（ 第１面）、弥生時代～古墳時代相当の検出面（ 第２面）を設定し、発掘調査をおこなった。

まず、第１面について記載する。調査区の西側で、水田遺構と南北溝（007SD）の他、過去の発掘調査で認められた東西溝の続きである溝（005 もしくは006SD）が認められた。また、調査区の東側では、中世以降に形成されたと思われる湿地性の堆積物から成る地層が全面に確認できた。断面精査の結果、この湿地性の堆積層は遺跡の東半分を南北に流れる自然流路の埋土の上層部分であることがわかった。水田遺構と南北溝はこの自然流路に沿って形成されていることから、調査区東部に存在した自然流路が埋没していく過程で形成された湿地帯を、水田として利用していたとも考えられる。水田遺構および溝跡の所属時期についてはおおよそ近世頃である思われるが、含有される遺物は少なく、明確ではない。自然流路については、中世～近世の遺物が含まれるものの、詳細な形成時期は現段階では不明である。

つぎに第２面について記載する。第２面の遺構は、過去の調査で確認された弥生時代～古墳時代の遺物包含層（黒褐色層）と同一の堆積層上で検出を行った。この黒褐色層が認められたのは調査区の西部のみであり、東部では確認できなかった。調査区東部の黒褐色層は、自然流路によって掘削されたと思われる。遺構については、溝が1 基検出されたのみと希薄であった。（ 奥野絵美）



1 面の水田遺構および溝（南から）



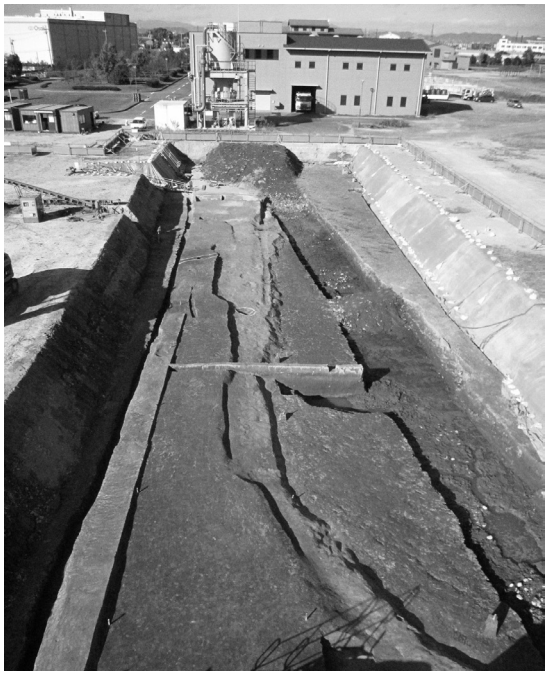
3 面全景（北から）



自然流路断面



自然流路全景（南から）



2 面全景（南から）



山茶碗出土状況

清洲城下町遺跡（きよすじょうかまち）

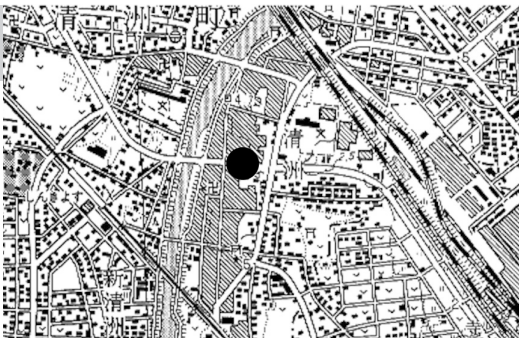
所　在　地　清須市清洲地内
（北緯35 度02 分58 秒 東経136 度06 分57 秒）

調 査 理 由　街路新設改良工事（住宅基盤整備）3・4・616助七西市場線

調 査 期 間　平成22 年4 月～平成22 年8 月

調 査 面 積　780 ㎡

担　当　者　樋上昇・奥野絵美



調査地点（1/2.5万「清洲」

調査の経過　県道助七西市場線建設に伴う事前調査として、尾張建設事務所道路整備課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。調査面積は約780 ㎡であり、調査区の西半分をA 区・東半分をB 区と設定して調査を行った。

立地と環境　清洲城下町遺跡は尾張平野南部に町域を広げ、名古屋市西区に東で接する西春日井郡清洲市に所在する。調査地点の旧態は住宅街であり、本調査区地点は1m 前後で盛土がなされている。

調査の概要　本調査区は、清洲城下町遺跡の南端部分に位置している。過去の調査成果からは、町家や武家屋敷が存在していたと推定される場所である。今回の調査で確認された遺構は、宿場町期の時期に属すると思われる大型建物跡・井戸・溝・土坑、城下町期に属すると思われる自然流路・溝・土坑跡などであった。

調査区の基本層序は、標高約5m の現地標高から現代の盛土および撹乱が約1m 入り、その下に宿場町期相当の整地面および遺構面が認められる。さらに下層には城下町期の遺構面が認められるが、見つかる遺構の数は少数である。セクション面の観察によると、地震の噴砂痕や洪水性の堆積物によって城下町期の土層は激しく撹拌されていることがわかる。そのため、城下町期の遺構の大部分はそれらの自然現象によって失われている可能性がある。

よって城下町期以前の本調査区付近は、地震や洪水に見舞われる地形として不安定な場所であったと思われる。その後、宿場町期以降に人間の生活の場として比較的安定した地形となり、幾度かにわたって大規模に整地が行われ、美濃街道沿いの宿場町として発展したと思われる。（奥野絵美）


大型建物全景（宿場町期）


大型建物礎石出土状況写真



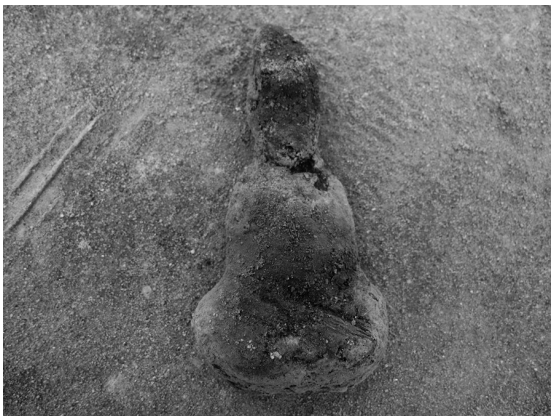
自然流路全景（北から）



結桶井戸（城下町期）



瓦積井戸（宿場町期）



懸仏（城下町期）



天目茶碗（城下町期）



花瓶（宿場町期）

上品野E窯跡（かみしなのいーかま）

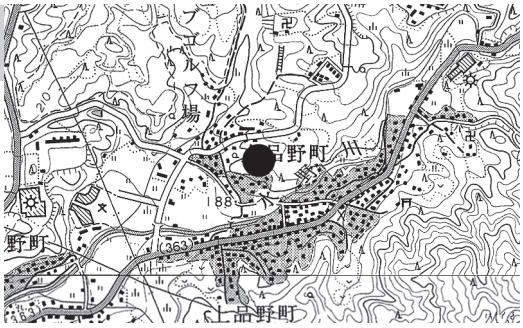
所　在　地　瀬戸市上品野町
（北緯35度15分24秒 東経137度08分19秒）

調査理由　道路改良工事国道363号

調査期間　平成22年4月～平成22年7月

調査面積　360㎡

担　当　者　小澤一弘・武部真木



調査地点（1/2.5万「多治見・猿投山」）

調査の経緯と経過　国道363号道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け発掘調査を行った。調査面積は360㎡である。

立地と環境　遺跡は瀬戸市北東部品野地区の北東丘陵部にあり、同事業により中世・戦国期にかけての平山城、桑下城跡の発掘調査（平成20年度）が行われた際に新規に発見された。東西方向に細長い標高200m前後の丘陵尾根を利用した城跡の範囲ではやや西寄りの部分にあたり、城跡の北側を画する北向き斜面に窖窯１基と前庭部平坦面、土坑、排水溝、そのほか縄文時代の陥し穴１基を確認した。

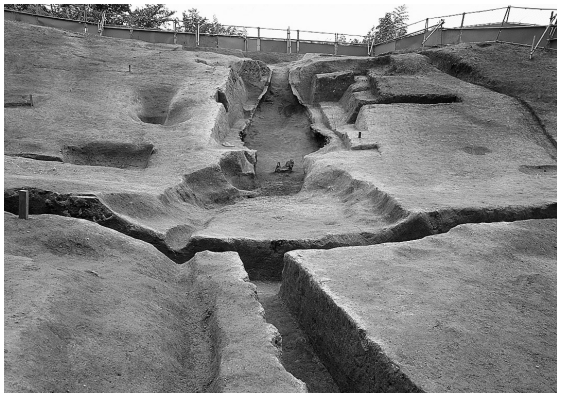
調査の概要　窯体の規模は全長9.16m、焼成室最大幅2.35mを測り、焚口は撹乱を受けていたものの、天井とダンパーの一部が検出されるなど遺存状況は比較的良好であった。焼成室天井は分炎柱のすぐ後方からの大部分が残っており、斜度20°から40°近くにもなる床面に高さ1m弱の空間が確保されていたことが観察できた。壁面は地山掘抜きのままで修復痕はみられず、床下は少なくとも２次の改修痕が確認できた。また東側壁際の溝（020SD）は暗渠状となっており、窯構築時に排水用に設けられたとみられる。前庭部は幅約3.2m、主軸方向に約8mの範囲の平坦面が造られ、東側に土坑（017SK）、排水溝（014SD）が設けられていた。調査区付近の旧地形は、西に開口する谷状地形であったと推定でき、この窯にともなう灰原は、調査範囲外の北西側に続くものと予想される。

そのほか、尾根頂部から北側に少し下った地点で見つかった土坑（009SK）は長軸1.65m、短軸1.42m、深さ1.67mであり、底面に直径15cm程度の小ピットをもつ。桑下城跡の調査においても同様の規模の土坑が多数検出されており、構造や配置などから陥し穴と推定されている。

出土遺物　出土遺物は山茶碗、小皿、焼台を中心に須恵器壺片、石器（チャート剥片）などコンテナ約40箱がある。遺物の出土状況をみると、窯体内には側壁に寄せるように大量の焼台が残され、前庭部左側にかけての範囲では逆に焼台は少なく、大量の山茶碗・小皿が廃棄されてあった。最終操業時の窯出しから検品、選別へといった一連の作業の流れが窺われる。

重ね焼きの際の山茶碗・小皿の蓋（最上部）、台（最下部）、破損・溶着品の分炎棒への利用など、窯道具あるいは窯構造物の一部としての再利用が確認できる資料も多く、調整具とみられる加工痕のある陶器片では前庭部排水溝で３点がまとまって出土した。

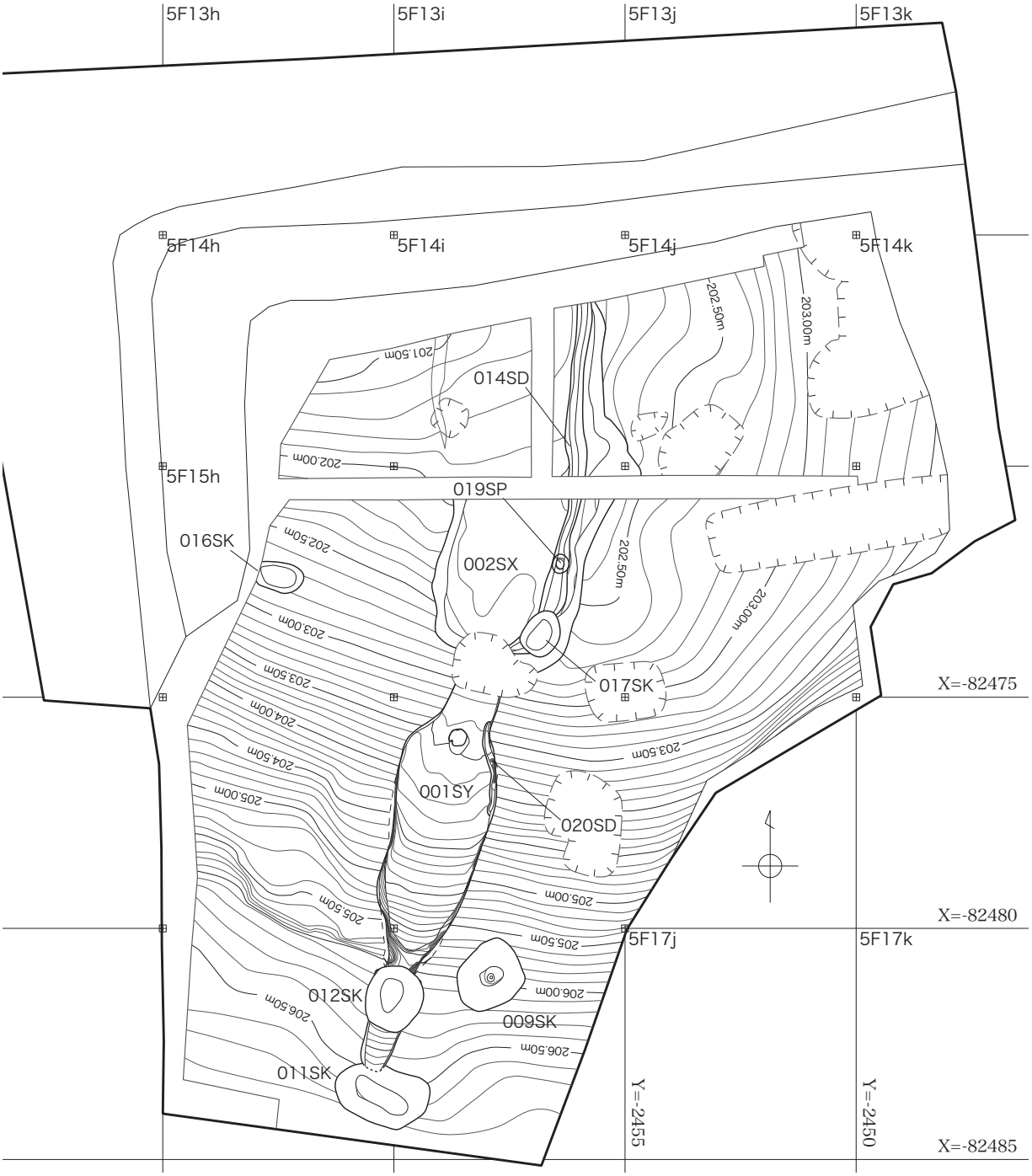
まとめ　上品野E窯跡は尾張型山茶碗第8～9型式、14世紀前葉を中心に操業していた山茶碗専焼窯であり、これまでに知られている尾張型山茶碗の窯跡分布域では、最も北東に位置する窯跡となった。水野川をはさんで南側の丘陵部には続く時期の中洞窯跡、宇トゲ窯跡（いずれも古瀬戸を併焼）があり、桑下城が構築される以前の付近の様相を伝える資料としても注目される。（武部真木）



完掘状況（北から）



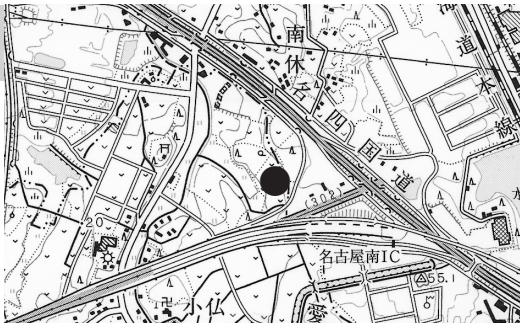
陥し穴 009SK 完掘状況（北東から）



主要遺構配置図（1:150）

別岨古窯群（べっそこよう）

所　在　地　大府市共和町地内
(北緯35度3分2秒 東経136度56分27秒)
調 査 理 由　内陸用地造成事業「大府木の山地区」
調 査 期 間　平成22年4月～7月
調 査 面 積　1200㎡
担　当　者　池本正明・石井香代子



調査地点（1/2.5万「鳴海」）

調査の経過　今回の調査地では愛知県企業庁が工業団地造成を予定しており、埋蔵文化財調査センターの調整のもと、愛知県埋蔵文化財センターが調査を実施した。当地は以前から窯体の一部が露出し、遺物が散布する場所であった。愛知県遺跡分布地図にもここに2基の窯跡があることが記されている。2009年度の試掘調査で窯体が少なくとも2基、さらに灰原が広がっていることが確認されたため、今回の本調査を行うことになった。調査期間は平成22年4月から7月までである。

立地と環境　別岨古窯群は知多半島の根元の丘陵地帯の南西斜面に構築されていた。この地域の丘陵地帯は多くの窯が築かれたところであり、別岨はちょうど猿投窯の南限と、知多古窯群の分布北限が接するあたりに当たる。先述の分布地図では別岨地内、今調査地から少し離れた場所に他にも窯跡があったことが記されているが、現在は失われている。

窯体以外の中世の遺跡では西400mに弥生時代からの複合遺跡である子安神社遺跡が立地しており、中世陶器が出土しているが、それ以外の顕著な遺跡はいまのところ確認されていない。

調査の概要　調査地の周辺は伊勢湾岸自動車道や名古屋高速が走り、土地の改変が進んでいる。窯跡のある丘陵斜面も元はさらに上まで続いていたが、現在は削平されている。調査地内も東西、南北ともに撹乱が深く入いっていたが、幸い、窯跡を検出した地区は台状に掘り残されていた。調査はここを中心として1200㎡で実施した。

調査の結果、試掘で確認した2基に加えあらたに1基、計3基の窯体とこれらの窯体に伴う灰原を検出した。

００１ＳＹ　001SYは最も北に位置する窯体で、天井部分は焼成室の一部しか残っていなかったが、煙道部端から排水溝までを検出した。焚口から煙道端までの全長は約11mをはかる。

焼成室は中程が膨らみ、最大幅約2.6mであった。床面には焼台痕が残る。床面は多いところで5回の貼り直しが見られ、複数回にわたる使用を示していた。下方1/3ほどには床面下に隙間無く伏せた山茶椀を検出している。

燃焼室には隣の002SYで出たとみられる灰層が流れ込んでおり、002SYよりも古いことが知られる。出土遺物は山茶椀と小椀がほとんどを占めていた。

この窯体の前庭部周付近で浅い土坑を検出しており、001SYに伴う遺構とみられる。

００２ＳＹ　3基の窯体の中で最も高い位置に築かれた窯体である。煙道部は造成のために途中で切断されており、この部分が地表に表出していた。

煙道部以外の残りは非常に良く、焼成室の天井部分はほぼ完全に残っていた。窯体内部も分焔柱近くから上端にかけての側壁近くでは、原位置を保ったままの焼台が多数残っていた。床面下には001SYと同様、伏せて並べられた山茶椀を検出している。002SYの検出長は燃焼室から煙道途中まで約8.4m、最大幅は約2.5mをはかる。

前庭部は数層の整地層があり、また窯壁や床の貼り直しが確認できるなど数次にわたる

利用が認められる。窯の周辺では、前庭部左右に土坑と、燃焼室端あたりから伸びる溝を検出している。後者は位置的に排水溝の可能性がある。

窯からの出土遺物は001SYと同じく山茶椀と小椀がほとんどを占めていた。

003SY　後世の撹乱によって地山まで削られた場所に、かろうじて分焔柱と燃焼室、焼成室の一部が残っていた。平面形は001SYに似て、分焔柱から焼成室にかけて胴が張っている。床面に補修の貼り直しが見られるが、床面下施設はなかった。検出長は約5.9m、検出最大幅は約2.5mをはかる。

灰原　001SYと002SYの下に広がる灰原を数層検出している。検出位置からこれら2基の窯体に属すると考えられるが、今後、灰原検出遺物や位置の検討が必要である。

その他の遺構　001SYの上で素掘りの野井戸（006SE）を検出している。検出面での直径約0.8m、崩落の危険があるため完掘できなかったが、2.2m以上の深さがある。遺物は出土していない。この他、いくつかの小規模な土坑を検出しているが、窯体に伴うものとは考えにくい。

出土遺物　遺物は前述のように、製品では山茶椀と小椀、小皿がほとんどを占めている。灰原からは陶丸、片口、鉢の破片も少数出土している。その他に多数の焼台や障壁片とみられる幾層にも重なった粘度塊が溶着した破片が出土している。

窯体関連以外の遺物は弥生土器片、石鏃片が包含層から数点出土した。

まとめ　今回の調査では主に山茶椀を焼いていた窯体を3基、それらの窯体を起源とする灰原を検出した。各々の窯体から出土した遺物から、操業順序は001SYまたは003SY→002SYと考えられ、12世紀後半～13世紀初頭の年代が与えられる。001SY、002SYの2基では、それぞれ床面下施設を検出している。椀の設置や配置面積などに違いがあり、これが時期差によるものか、窯体の構造に起因するものかなど、今後の検討課題であろう。（石井香代子）



調査区全景



001SY最終面



001SY床面下施設



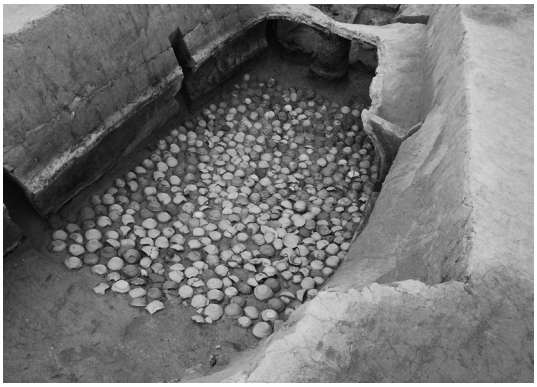
001SY床面下施設拡大



002SY最終面



002SY床面下施設



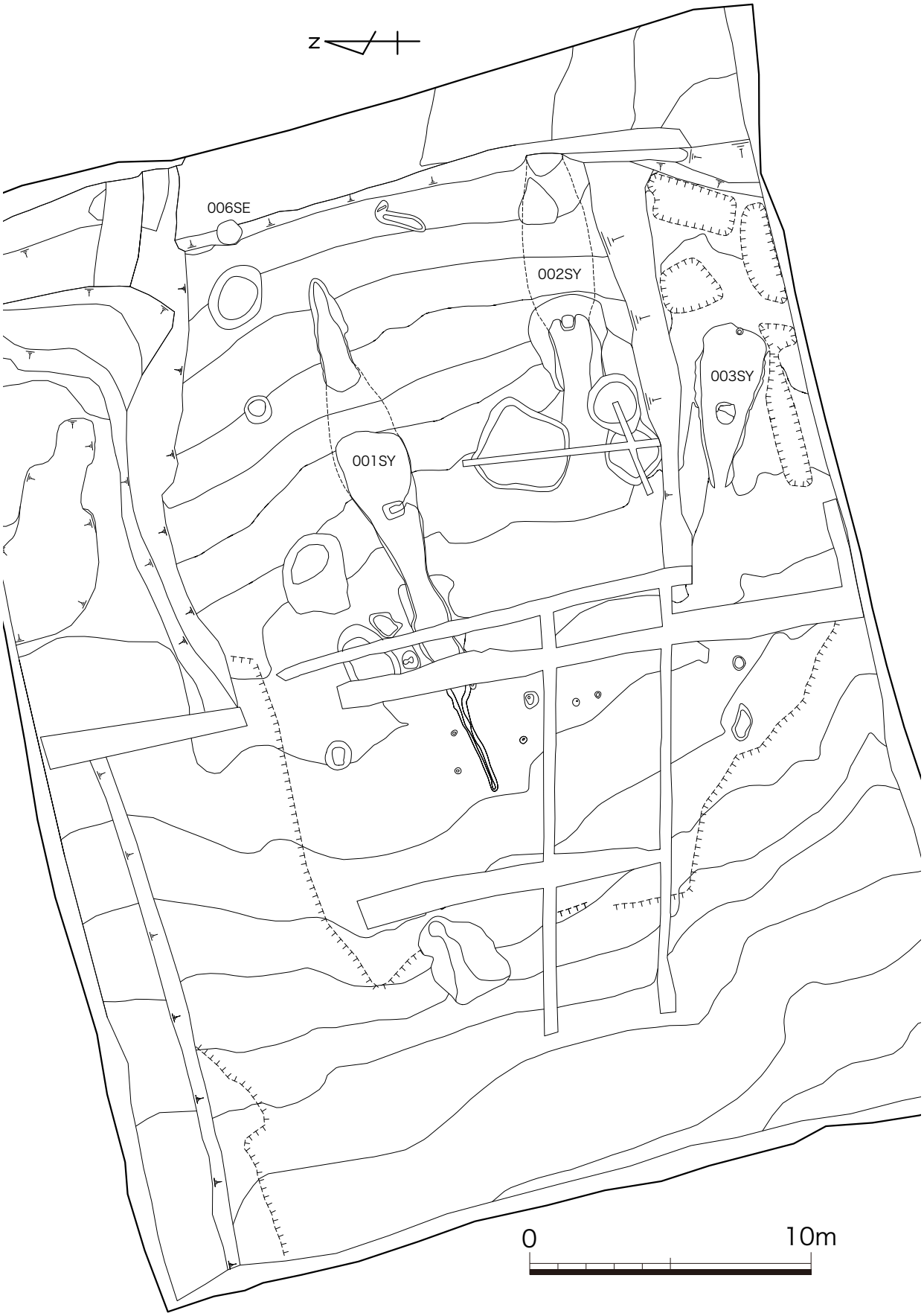
002SY床面下施設拡大



003SY最終面



002SY前庭部灰原検出状況



別岨古窯遺構全体図（1：200）

八巻古窯群（はちまきこよう）

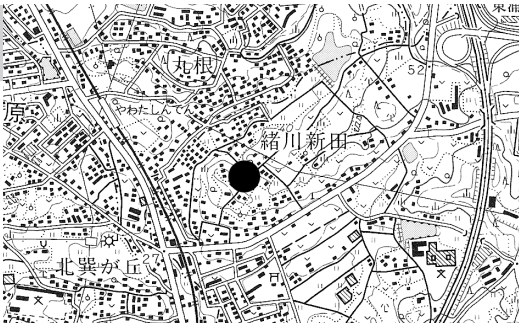
所　在　地　知多郡東浦町緒川字八巻
（北緯34度58分18秒 東経136度55分3秒）

調 査 理 由　街路改良工事3・3・2号名古屋半田線

調 査 期 間　平成22年4月～平成22年7月

調 査 面 積　770㎡

担　当　者　池本正明・阿部敬・鈴木恵介

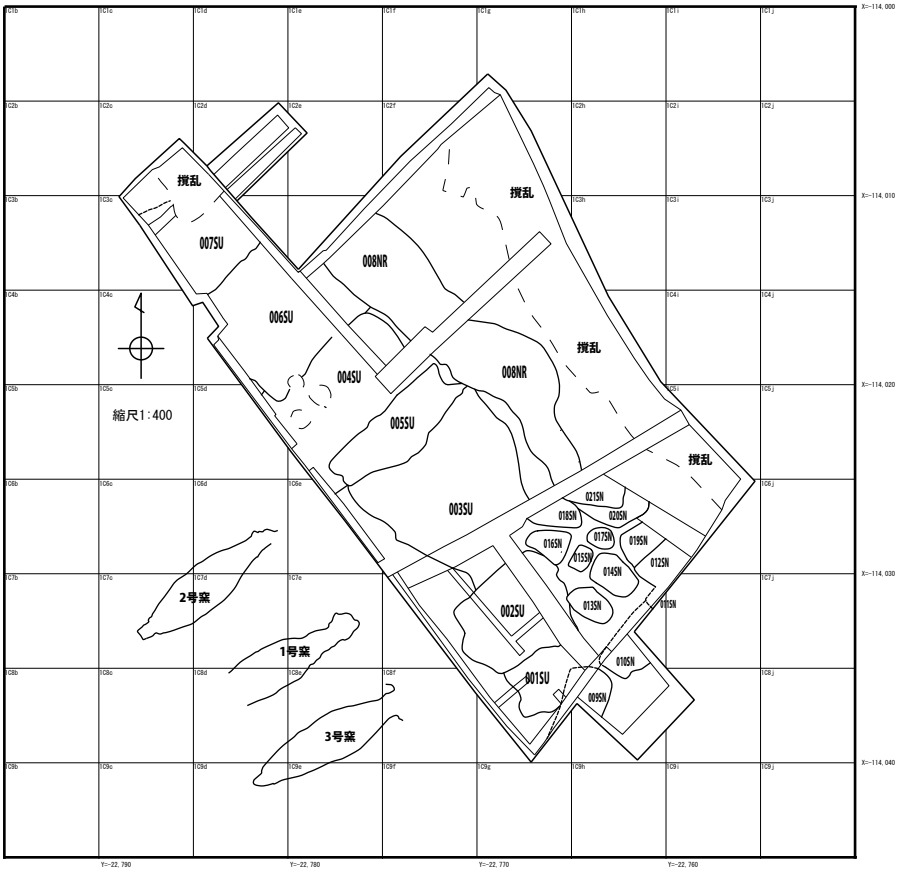


調査地点（1/2.5万「刈谷」）

調査の経過　調査は、街路改良工事 3・3・2 号名古屋半田線建設に伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。

調査の概要　八巻古窯群は、標高 50m 前後の東西に延びる丘陵の頂上付近に位置し、北西方向に開口する小支谷の北東斜面に位置する。

過去の八巻古窯群の調査は、昭和 36(1961) 年に愛知用水工事の事前調査として名古屋大学考古学教室によって実施された (以下、S36 調査)。今回の調査区は、S36 調査区の北東側にあたる。調査対象区内は南西から北東に向かって下る斜面とそれに続く平坦部から成る。斜面部において八巻古窯群に伴う灰原を、平坦部では近世～近代と考えられる水田跡や自然流路を検出した。出土遺物は中世陶器 (いわゆる山茶碗) が多くを占め、その内多くは碗、小碗・皿、焼台である。少数の短頸壺、片口鉢、広口瓶も確認されたが、これらが出土したのは下位の灰層に限られるため、窯体・操業毎の焼成器種に偏りがあったことも想定された。



八巻古窯群10区調査区と遺構（1:400）

中世前期の未確認の窯体に伴う灰層

八巻古窯群に伴う灰原は、層位からおおよそ 7 つの灰層に分別できた。いずれの灰層も中世陶器を大量に包含し、斜面の上位である南西から下位の北東方向に向かって堆積している。灰層には遺構番号を付番した。層位および出土遺物から最も古相を示したのは 003SU である。出土遺物には輪花碗や高台の高い碗を多く含み、少数ながら短頸壷、片口鉢も含む傾向にある。一方新相を示すのは 006SU・ 007SU であり、無高台で底径の小さな皿を含み、碗の底径は小型化しているものが多く見られた。

八巻古窯群の推定位置は、現況が変化し、詳細な位置については不明であったが、斜面上位に隣接する畑の所有者のご好意によって、窯体の一部が残存していることを確認できた。確認した窯体底面の位置関係は南が低く北が高い。そこで S36 調査の結果に基き、南側の窯体を古窯群中最古の八巻 1 号窯、北側の窯体を八巻 2 号窯と推定した。これらの窯体と灰層の位置関係は、八巻 1 号窯の斜面下位に 003SU、八巻 2 号窯の斜面下位に 005SU が位置する。この窯体の新旧関係と今回の灰層の堆積状況にも矛盾はない。また、八巻 3 号窯は 1 号窯のさらに南に位置していたが、すでに滅失していた。

S36 調査において、「なお第二号窯の北に更に一基ある如くであったが今回の調査に於いては確認できなかった」と報告された未確認の窯に相当する灰層として、平面位置では 006SU・007SU が該当する。前述のように 006・007SU からは新相を示す遺物が出土しており、未確認の窯では最新の 2 号窯よりもさらに後に操業が行われていた可能性がある。

近世～近代

近世～近代の遺構としては水田跡 (009SN ～ 021SN) と自然流路 (008NR) を検出した。水田は細かく区切った水田畦畔に区画されている。　（鈴木恵介）



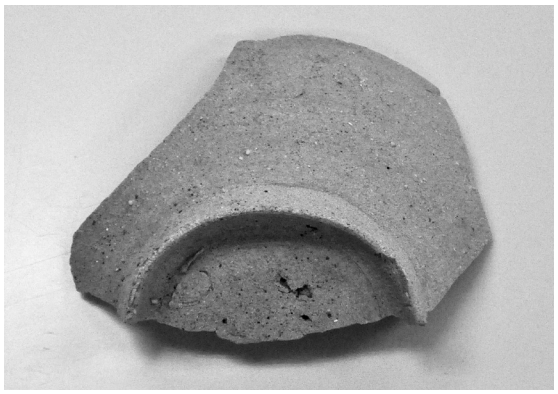
八巻古窯群全景（中央上の畑地に1号・2号窯が残存）



006SU灰原検出状況



003SU遺物出土状況



003SU出土の輪花碗

車塚（くるまづか）遺跡

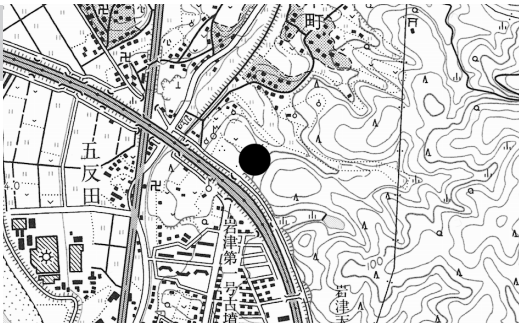
所　在　地　岡崎市岩津町車塚地内
（北緯35度0分46秒　東経137度10分23秒）

調 査 理 由　道路改良工事（主）岡崎足助線

調 査 期 間　平成22年10月～平成23年2月

調 査 面 積　2,300㎡

担　当　者　池本正明・石井香代子・鈴木恵介



調査地点（1/2.5万「豊田南部」）

調査の概要　調査は、県道岡崎足助線道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。

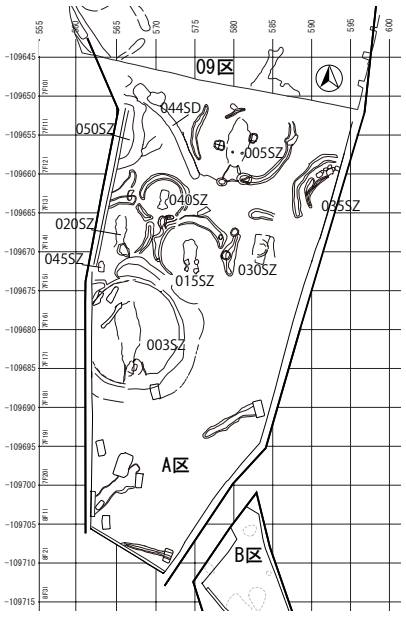
車塚遺跡は、矢作川左岸の天神山より、北西に伸びる丘陵が南西向きに屈曲した標高40m ～ 50m の台地上に位置する。台地の西裾には於御所川が巡り、川を隔てた西側の丘陵上に東郷遺跡、その南の中位段丘上（碧海面）に於御所遺跡が存在する。転じて車塚遺跡東方の天神山から伸びる各丘陵上や天神山山腹には岩津古墳群、天神山古墳群、車塚古墳群、八ツ木古墳が存在し、周辺には多数の６世紀代から７世紀代の古墳が確認されている。

今年度の調査区は、09 区に南接した区域であり、丘陵の南に面した斜面に位置する。調査対象区はＬ字を成し、L字の垂直部分をＡ区、水平部分をＢ区と呼称した。調査はＢ区・Ａ区の順に実施した。主な遺構はＡ区側、09 区に南接する部分に集中し、縄文時代・弥生時代後期・古墳時代後期の遺構・遺物が確認できた。

縄文時代　Ａ区斜面部分の表土より石鏃３点を確認した。表土中の出土であることから、近現代の耕作等によって表出したと考えられる。今回の調査では縄文時代の遺構は確認できていない。

弥生時代終末期～古墳時代初頭　弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺構は溝１条、方形周溝墓１基が確認された。いずれもＡ区北西端に位置し、09 区で検出された遺構の連続、あるいは並列部分である。溝（044SD）は検出段階での長さ 14.5m を測り、09 区で検出された 1011SD に連続する。方形周溝墓 (050SZ) は、調査区の西際で検出され、墳丘東側の溝と幅約 1m 分の墳丘を検出した。墳丘部分は幅が約 1.3m の溝で囲まれ、墳丘部分の長辺は7.1mを測る。主体部等は確認できない。

古墳時代後期　古墳はＡ区北半部の丘陵上に集中して検出された。円墳７基、方墳１基、合計８基の古墳を確認した。いずれの古墳も石室下部や周溝の一部を残すだけの状況である。003SZ は墳丘裾に列石を２～３段残存する、墳丘の直径約 13.5m を測る円墳である。石室は奥壁と側壁の一部を欠く、推定長約 7.5m の胴張り複室構造を持つ。過去に調査された類似の石室は、岩津２号墳と平面形状、規模ともに似ており、003SZ よりや



車塚遺跡10区平面図（1:750）

や大型の石室では平面形状の似る石室に石田２号墳、中ノ坂９号墳がある。出土遺物は、石室内で原位置を保っていたものは無いが、実施中の石室内土壌洗浄では長頸鏃の茎部破片が数点検出されている。また、石室の前庭部分に掘られた撹乱から７世紀末と考えられる須恵器高杯、杯蓋が出土しており、こちらは墓前祭祀の可能性も考慮する必要がある。005SZ は墳丘直径約 11.5m を測る円墳で石室平面形は胴張り単室構造である。奥壁付近から７世紀代後半と考えられる須恵器杯蓋・杯身が出土した。025SZ は墳丘径約 10m の円墳で、墳丘の西半分を調査区内で確認し、石室はほぼ調査区内に収まる。石室内から管玉３個、勾玉１個が出土した。030SZ では北・西辺の周溝を検出したが、いずれも周溝の内側が直線的であり方墳の可能性がある。墳丘規模は不明で、石室は敷石と西側壁の一部を残す。石室内からの遺物は土師器長胴甕１点のみ。西側の周溝からはハソウ、直口壷等が出土したがいずれも７世紀代と考えられる。015SZ、020SZ、040SZ、045SZ はいずれも小型の円墳と思われる。径は約 4m から 9m を測る。040SZ と 045SZ は再葬を目的としたいわゆる小石室、015 と 020 は胴張り形単室の石室である可能性がある。

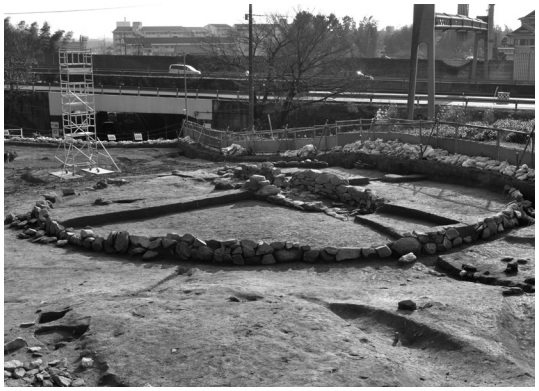
総　　括　今回の調査では弥生時代後期の方形周溝墓１基、古墳時代後期の古墳８基等が検出された。09 区北半部では弥生時代後期の方形周溝墓、古墳時代後期の古墳とそれぞれ同時期の建物跡が多数検出されているため、近接する建物群と墓域という評価が可能である。古墳群としての位置づけは、同じ丘陵に属する車塚古墳群、同様に天神山を起点とする別の丘陵上に築かれた岩津古墳群や天神山の頂上から山腹にかけて築かれた天神山古墳群も含めた広範囲の評価が必要と考えられる。（鈴木恵介）



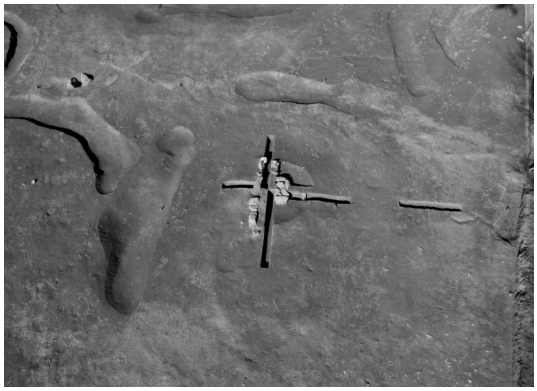
車塚遺跡10区全景写真（背後は天神山）



中央が胴張り単室構造の005SZ



003SZ列石（墳丘南面部分では１段のみ検出）



方墳の可能性がある030SZ

五反田（ごたんだ）遺跡

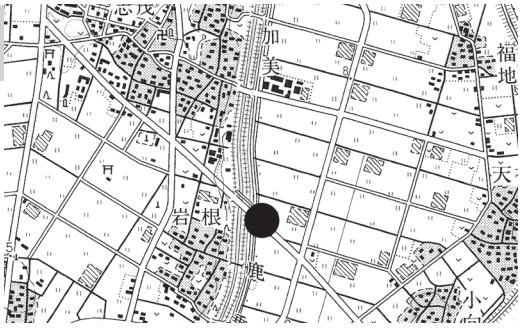
所　在　地　安城市小川町五反田・岩根下
（北緯34度54分13秒 東経137度5分43秒）

調 査 理 由　床上浸水対策特別緊急事業（鹿乗川）

調 査 期 間　平成22年7月～平成22年10月

調 査 面 積　2,260㎡

担　当　者　池本正明・石井香代子・阿部敬



調査地点（1/2.5万「西尾」）

調査の経過　愛知県西三河建設事務所より愛知県教育委員会を通じて、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。

立地と環境　遺跡は矢作川の支流である鹿乗川左岸の沖積低地、標高約6mに立地する。このあたりの低地の開発は弥生時代には既に盛んに行われていたことが分かっており、古代では水田跡が発見されている。現在でも鹿乗川に並走する明治用水から取水する田が広がっており、北には下懸遺跡、南には惣作遺跡、明治用水路と鹿乗川を隔てた西には加美遺跡など、付近には多数の遺跡が存在する。弥生時代から古墳時代にかけてのそれらの遺跡は鹿乗川流域遺跡群と呼ばれている。

調査の概要　鹿乗川と明治用水路を東西に跨ぐ小川橋を挟んでその南北を調査範囲とし、北部をA区、南部をB区とした。A区では近世以降の溝、中世前期の陶器と溝、弥生時代の土器とガラス玉、方形周溝墓およびそれに関連する溝が検出された。B区では近世以降の溝、弥生時代の土器と管玉が検出された。

弥生時代終末期～古墳時代初頭　遺構としては、A区で方形周溝墓１基とそれに関連する可能性のある溝が検出された。方形周溝墓は調査範囲内で全容を把握することが出来なかったためその認定には限界があるものの、周溝内から手焙形土器２点、付近の溝からはガラス玉３点が発見されるなど、墓域の存在を予想させる遺物が多く認められた。ほかの溝については確定的な証拠は乏しいが、方形周溝墓の一角を構成する可能性がある。遺物としては、上記のほかに高杯と壺が検出された。その帰属時期は、互いに僅かな違いはあるが、弥生時代終末期のものと見て差し支えない。B区では当該時期の遺構は認められなかったが、遺物としては土器片と管玉が発見された。

中世前期（13世紀）　A区で中世前期の無釉の陶器碗が検出された。完形に近いものが１点と破片が数点である。完形に近い方は13世紀のものと推定される。遺構としては、幅約30cmの狭い溝が縦横に走っていた。垂直的には弥生時代のそれと同一平面において検出されたが、それを切っていたので明らかに後代のものと考えられる。帰属時期は上記の陶器からの類推である。B区では目立った遺構はないが、無釉の陶器片がわずかに回収された。

近世以降　A･B区ともに溝が検出された。A区では東西方向と南北方向に走る幅１mほどの溝が十字に交差した状態で検出された。B区では幅30cm程度の規格の揃った溝が西北−東南方向に約1m間隔で並列されていた。田畑に伴うものと推定される。遺物としてはB区で漆塗りの木碗が１点検出された。より具体的な時期は検討中である。

総　括　北にある下懸遺跡と南にある惣作遺跡の両方で習書木簡が検出されていたので、五反田遺跡でももしかしたら同じような遺物が出るかもしれないと期待されていたが、残念ながらそれに応えることはできなかった。しかし鹿乗川流域遺跡群において弥生時代終末期から古墳時代に帰属する方形周溝墓が検出された事例は少なく、また愛知県内において類例

の少ない手焙形土器を伴っていたことは特筆に値するだろう。ガラス玉は今後行う予定の自然科学分析によって往時の社会的ネットワークの解明に資するところがあると思われる。

（阿部　敬）



弥生時代および中世遺構の検出状況（A区）



中・近世遺構の検出状況（B区）



周溝出土の手焙形土器1



周溝出土の手焙形土器2



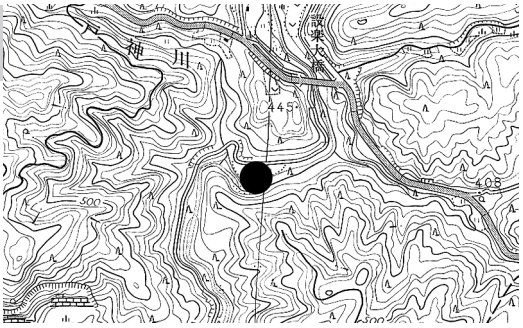
壺形土器



石製勾玉とガラス小玉

川向東貝津遺跡（かわむきひがしかいづ）

所　在　地　北設楽郡設楽町川向字東貝津
（北緯35度6分26秒 東経137度33分54秒）
調 査 理 由　設楽ダム建設
調 査 期 間　平成22年11月～平成23年1月
調 査 面 積　384㎡
担　当　者　池本正明・阿部敬



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　設楽ダム建設用の県道拡幅に伴う事前調査として、国土交通省から愛知県教育委員会を通じ、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。

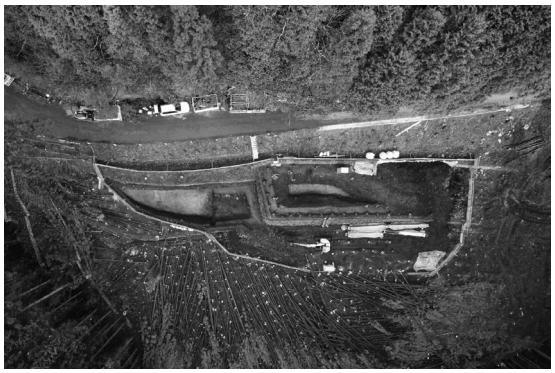
立地と環境　遺跡は豊川支流の境川右岸の標高約370～380mに立地する。付近には縄文時代草創期から晩期の遺跡が散在しており、川向地区に隣接する大名倉地区では縄文時代早期前半を主体とする大名倉遺跡などがよく知られている。30年ほど前までは近世末ないし明治期に拓かれたと推定される棚田が展開していたが、現在ではスギの植林が行われている。

調査の概要　今年度は、確認調査によって推定された遺跡範囲のうち北半にあたる区域を対象とし、主として縄文時代包含層の調査を行った。石垣で区画された棚田面を単位としてA区、B区、Ca/Cb/Cc区の都合５区に分け、概ねこの順で調査した。結果として、A区とB区では山側の斜面地にあたっていたことから崖錐堆積物が著しく、遺物は近世末ないし明治期の磁器片が1点出土しただけだった。他方、緩斜面または平坦面にあたっていたC区では、縄文時代の土器約30点と、時代不明の土坑が５基検出された。

縄文時代の埋納土器　縄文時代後期初頭の称名寺式またはこれに併行する型式と推定される土器が検出された。正位の状態にあったことや底部が欠損していたことから意図的に埋納されたものと推測される。ただし包含層が締まりの弱い黒色土壌中だったことから、埋納した土坑の掘り肩等は観察できず、埋納を示す直接的証拠は認められなかった。また、住居址等の遺構も検出されなかった。周囲からは土器片が比較的集中して検出された。

時代不明の土坑　Cb区南壁にて土坑４基、Cc区にて土坑１基が検出された。Cb区の土坑のうち１基は覆土の状態からして最近のもので、ほか３基は縄文時代かそれよりも下る時代のものと推定される。この３基のうち１基は直径約60cmの円形を呈し、深さ約70cm、内部には直径20cm程度の亜角礫と亜円礫が10点以上包含されていた。人為的に入れられたものであろうが、配列された状況は認められなかった。現在のところ機能は不明であるが、これらの特徴はCc区の土坑１基のそれとよく似ている。

総　括　管見の限り、県内における縄文時代の埋納土器の検出事例は、住居址内外を含めて全部で15例（明らかな土器棺を除く）が知られている。関東から中部に比較すると非常に少ないため、この発見は希少な例といえるだろう。この遺跡では縄文時代早期と後期の少なくとも２時期の存在が確かめられたことになるが、両時期ともに、まだ本調査されていない南半への広がりが期待される。（阿部　敬）



遺跡全景



礫を含む土坑



埋納土器

石座神社遺跡（いわくらじんじゃ）

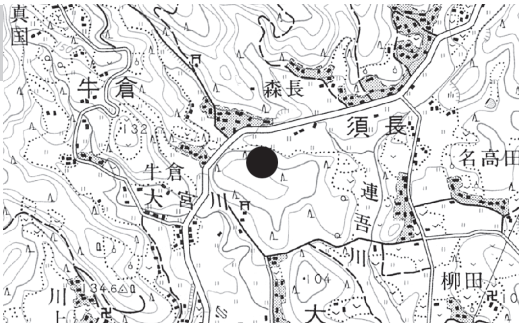
所　在　地　新城市大宮
（北緯34度55分38秒 東経137度31分10秒）

調 査 理 由　第二東海自動車道横浜名古屋線

調 査 期 間　平成22年5月～平成23年３月

調 査 面 積　10,330㎡

担　当　者　松田　訓・早野浩二・日吉康浩



調査地点（1/2.5万「三河大野」）

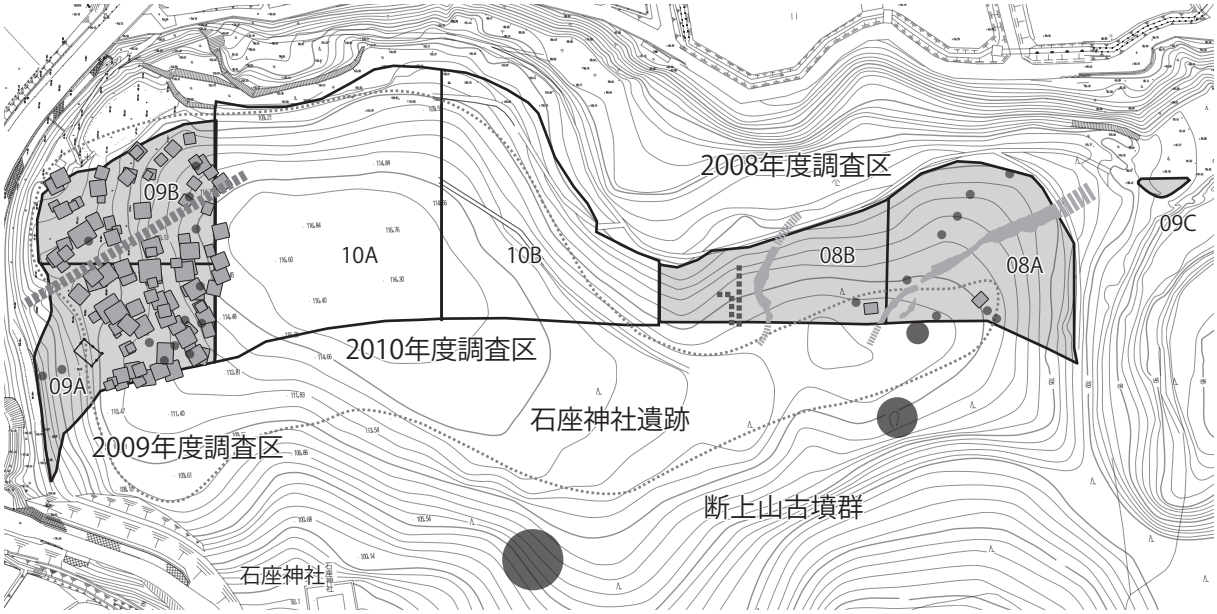
調査の経過　本調査は、第二東海自動車道横浜名古屋線にかかる事前調査で、中日本高速道路株式会社豊川支社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成22年５月から平成23年3月までで、調査面積は10,330㎡である。なお、平成20年度には丘陵東端部の5,200㎡、平成21年度には丘陵西端部の4,720㎡の調査をすでに実施している。

立地と環境　石座神社遺跡は、豊川中流域右岸の上位断丘面上に立地する。段丘面下の東西には連吾川と大宮川が流下し、段丘面上は舌状の平坦地を呈する。遺跡周囲の標高は約110mで、段丘面下との比高は約30mである。

同じ段丘面上には10基の古墳から構成される断上山古墳群が分布し、段丘面の南端付近には、前方後方墳の断上山10号墳（全長約50m）と弥生時代後期から古墳時代に継続する南貝津遺跡が立地する。また、連吾川に面した段丘下には、平安時代・鎌倉時代を中心とする加原遺跡、大宮川に面した中位段丘面上には、弥生時代後期・古墳時代前期の遺跡である吉竹遺跡が立地する。

調査の概要　今年度の調査は、段丘面上の平坦面と北向き斜面を対象とした。調査の結果、縄文時代、弥生時代後期・古墳時代前期、古代・中世、近世以降の遺構と遺物が確認された。以下、内容が判明したA区を中心に調査の概要を記述する。

縄 文 時 代　縄文時代の遺構としては早期前半の煙道付炉穴5基、石囲炉を伴う中期後半の竪穴住居1棟、筒状・袋状の大型土坑が18基確認されている。



石座神社遺跡調査区配置図（1:2,500）

煙道付炉穴は二等辺三角形（3580SL・3590SL）及び倒卵形（5050SL・5060SL）の平面形を呈しており、2基を1単位としてつくられている。煙道側の壁面は著しく被熱しており、検出時は焼土がV字に広がるような状態で検出された。3590SL・5050SLの底面からは押型文土器の破片が出土している。

竪穴住居（3001SI）の平面形は3×2.2mの楕円形を呈しており、石囲炉は礫を長方形に並べてつくられている。石囲炉周辺からは深鉢の破片が1個体分出土した。

大型土坑は径1.5m、深さ1～2m程の規模が多く、底面において小土坑が検出されるもの（3800SK）が多いことから陥穴の可能性が考えられる。

その他の出土遺物としては、縄文土器、尖頭器・石匙・石斧・石鏃・石棒等の石器がある。なお、石棒は晩期に帰属するものと考えられる。

弥生時代後期・古墳時代前期

弥生時代後期・古墳時代前期は本遺跡において遺構・遺物が最も濃密な時期であり、10A区の丘陵西側緩斜面及び頂部平坦面においては、約170棟もの竪穴住居及び約10棟の掘立柱建物が重複した状態で確認された。竪穴住居の多くは地床炉、貼床、周溝を伴っており、なかには複数の地床炉を持つものも存在する。主柱穴配置は、明瞭なものと不明瞭なものが混在する。

丘陵西側緩斜面に建てられた住居は平面形が一辺4～5mの方形を呈している。緩斜面の掘立柱建物は等高線に沿うかたちで南北方向に列をなしてつくられており、桁行5m・梁間3m程のものが多い。

丘陵頂部平坦面は緩斜面に建てられたような規模の住居に加え、一辺7～9mの大型住居（3149SI・3261SI・3145SI・3150SI・3388SI・3407SI・3380SI）と大型掘立柱建物（3300SB・5000SB）の存在が特徴的である。大型住居のなかで3149SIは本遺跡最大の竪穴住居であり、その規模は9.3×9.0mである。構造の特徴として周壁に1.5～2m間隔（コーナーのみ近接）で小柱穴を持つことが挙げられ、壁立ち式竪穴住居と考えられる。なお3407SIも壁立ち式竪穴住居の可能性がある。大型掘立柱建物2棟のうち3300SBは桁行7m・梁間5mの規模で、桁行の一方の柱掘方が布堀り状を呈し、梁間の柱間が広い特徴を呈する。また3388SI・5000SB付近には、これに対応する可能性のある柵列も認められる。

その他特徴的な住居としては、一辺約3mの小型住居（4459SI・3947SI等）、地床炉に支柱石を埋設した住居（3308SI・3742SI等）、いわゆる馬蹄形遺構を伴う住居（3216SI・3321SI・3609SI等）、床面上に粘土塊が残されている住居（3002SI等）、粘土貯蔵穴を構築する住居（3742SI）、焼失住居（3002SI・3328SI等）、土器が大量に廃棄された住居（3283SI・3742SI等）などがある。

出土遺物は竪穴住居内を中心に検出された。今年度の出土遺物で最も注目されるものは3002SIから出土した、方格規矩四神鏡を分割した破鏡である。破鏡の破断面は丁寧に研磨され、懸垂用の穿孔が2孔穿たれている。土器は台付甕・高杯・広口壷・瓢形壷・小型壷・鉢といった各器種が検出され、同時にS字甕・パレス系壷・菊川式系の壷や高杯といった他地域系土器も検出された。その他、線刻土器、大型管状土錘・土玉・ミニチュア土器等の土製品、砥石・石製紡錘車・石製加工円盤等の石製品、鉄ヤリガンナ・板状鉄斧等の鉄製品も出土している。またごくわずかではあるが金属器生産の可能性を示す遺物も認められ、大型掘立柱建物3300SB付近の3282SIから粒状滓、4340SIからは板状の青銅製品が出土した。

古代・中世

古代・中世の遺構としては調査区を東西に走る大溝（1900SD）、10A区北側緩斜面にお



主要遺構配置図（1:500）

いて中世前期の竪穴状遺構（3531SK・3530SK・3129SK等）及び火葬骨を伴う土坑（3900SK・4000SK）が確認された。

大溝は断面が逆台形を呈しており、規模は幅約1.5m・深さ約1m程である。大溝には部分的に地山を土橋状に掘り残した施設がみられる。大溝からは須恵器数点と土師器皿が出土したことから、大溝の時期は古代から中世と考えられる。

中世前期の竪穴状遺構は北向きの丘陵斜面を掘削して構築されたもので、一辺3～5mの規模である。遺構からは山茶碗が出土した。火葬骨を伴う土坑は径0.8m、深さ0.5m程で、土坑から下層骨以外の遺物は出土していないが、周辺からは六文銭が出土している。

近世以降

10A区北側の緩斜面おいて、窯体（3200SY）が確認された。煙道・焼成室・焚口・前庭部灰層等の残存状態は良好である。焼成室は半地下式の構造で、径約1.5mの円筒形を呈する。煙道の先端部は礫で四方が囲まれていた。窯体の周辺からは近世以降の瓦と陶器が出土した。窯体構造や灰層の産状から、3200SYは近世以降に構築・使用された炭焼窯と考えられる。

ま と め

本遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての拠点的な集落であり、今年度の調査では、大型竪穴住居や大型掘立柱建物で構成される集落の中心施設の様相が明らかとなった。特に破鏡の出土は三河地方における初例であり、県内では名古屋市高蔵遺跡の虺龍文鏡（破鏡）、清須市朝日遺跡の虺龍文鏡（破鏡）に次ぐ古い鏡である。また、東日本の集落遺跡から出土した中国鏡としても数少ない貴重な例となる。このような遺構・遺物の内容から、遺跡は同一丘陵上に存在する断上山10号墳に対応する首長居館を擁していたと考えられる。

縄文時代については、今年度までの調査を通じて断片的ながらも、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の各時期の特徴的な遺構・遺物を検出した。これらは当地域の具体的な様相を知るための好資料になるものと思われる。　（早野浩二・日吉康浩）



10A区全景（北から）



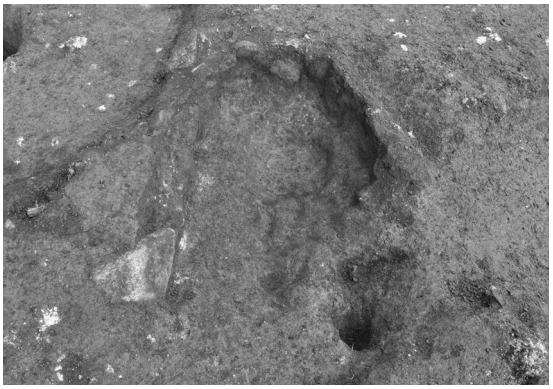
10A区全景　（西から）



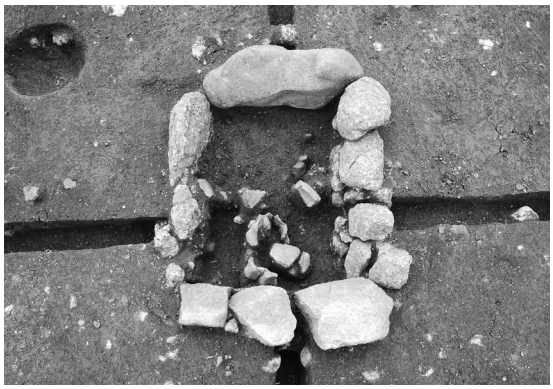
10A区全景（東から）



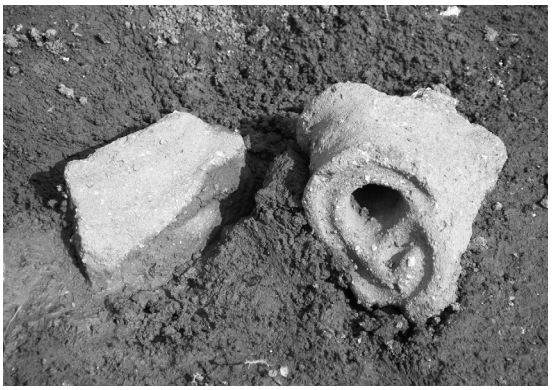
平面二等辺三角形の煙道付炉穴（3580SL）



平面倒卵形の煙道付炉穴（5050SL）



石囲炉（3001SI）



石囲炉周辺の縄文土器（3001SI）



大型土坑（3800SK）



石棒



焼失住居（3002SI）



3002SI出土の破鏡



壁立ち式の大型竪穴住居（3149SI）



大型掘立柱建物（3300SB）



小型竪穴住居（4459SI）



支柱石を埋設した地床炉（3742SI）



10A区平坦面竪穴住居群（西から）



10A区平坦面竪穴住居群（南から）



土器が廃棄された住居（3742SI）



柵列



古代・中世の大溝（1900SD）



近世以降の炭焼窯（3200SY）

なかやまとりで 中山砦跡

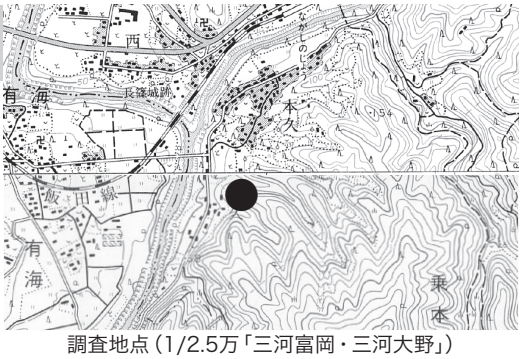
所　在　地　新城市乗本地内
（北緯34度55分7秒 東経137度33分44秒）

調 査 理 由　第二東海自動車道横浜名古屋線

調 査 期 間　平成22年6月～平成22年9月

調 査 面 積　2,830㎡

担　当　者　松田　訓・蔭山誠一



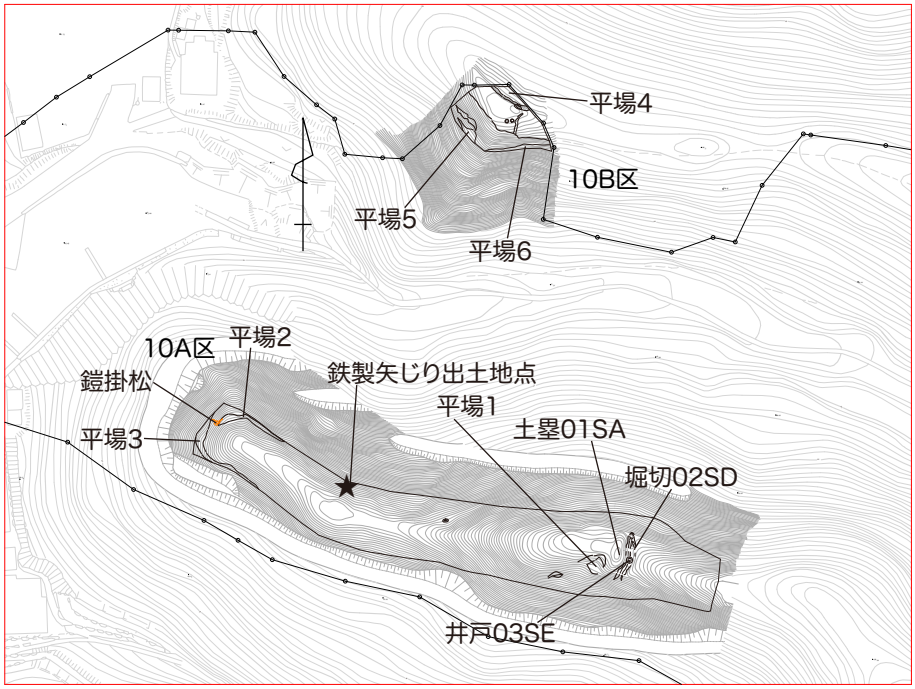
調査地点（1/2.5万「三河富岡・三河大野」）

調査の経過　発掘調査は、第二東海自動車道横浜名古屋線の建設に伴う事前調査として、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境　本遺跡は新城市の東部に位置し、地形的には、豊川が北西から流れる寒冷川と北東から流れる宇連川の合流する地点の東岸にある天神山から派生する北西側尾根筋の先端に立地している。調査区内における遺構検出面は標高 100m から 120m で、下の谷からの標高差は約 40m である。

調査の概要　遺構は地表より深さ 0.05m ～ 0.20m の表土（腐植土）層直下の基盤層上面にて検出を行い、10A 区において土塁 1 基、堀切 1 条、井戸 1 基、土坑 1 基、平場 3 ヶ所と 10B 区において土坑 3 基、平場 2 ヶ所を確認した。戦国時代の遺構と考えられるものは、10A 区の東に位置する土塁 01SA と堀切 02SD があり、土塁 01SA は、堀切 02SD の底から約 2.0m の高さがあり、堀切 02SD の幅は約 4m あり、断面形は「V」字形になっていた。堀切は 1 度掘り直され、堀切の北端には地山の岩盤を削り出した陸橋が検出できた。

出土遺物では、鉄製の平根形鏃が 1 点を確認できた。基部は折れているが、長さ 10.4cm 以上、刃幅 2.0cm、刃の長さ 5.5cm あるもので、類例として愛知県清須市朝日西遺跡から 16 世紀末頃の井戸から出土した同形態の鉄製鏃がある。



遺構全体図（1:2,000）

ま　と　め　　今回の調査により、長篠・設楽ヶ原の戦いにおいて、武田方の乗本五砦の一つとして文献資料の記録から知られていた中山砦跡について、初めて戦国時代にさかのぼる可能性の高い遺構と当時の戦いに使用されたと考えられる鉄製鏃を確認し、記録に残る中山砦跡を実証できた。（蔭山誠一）



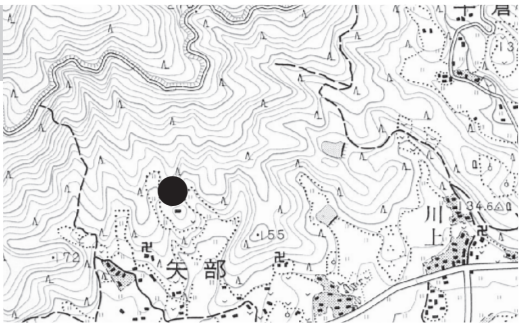
中山砦跡から長篠城跡を望む（手前東側に堀切跡、東から）



10A区全景（背後の山が天神山、北西から）

欠下城跡（かけしたじょう）

所　在　地　新城市矢部字欠下地内
（北緯34度55分27秒 東経137度30分17秒）
調 査 理 由　第二東海自動車道横浜名古屋線
調 査 期 間　平成22年10月～平成23年3月
調 査 面 積　2,500㎡
担　当　者　松田　訓・蔭山誠一



調査地点（1/2.5万「三河大野」）

調査の経過　発掘調査は、第二東海自動車道横浜名古屋線の建設に伴う事前調査として、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境　本遺跡は新城市の中央部に位置し、地形的には、豊川右岸の雁報山から南東にのびる丘陵の中腹に立地している。調査区は、欠下城址の北西に位置する丘陵上の平坦面とその東西野谷部にあたり、遺構検出面の標高は100mから120mで、東西の谷は比高差5m～10m程である。

調査の概要　調査区は欠下城址北西の沢部を10A区、その南側を10B区、10B区の東沢部を10C区として調査した。基本層位は地表より深さ0.5m～1.2mの表土（腐植土）層とその下にある近年の整地・盛土層があり、その下にて近世後半以後の主に水田造成とその整地・盛土層が0.2m～2.0m程あり、その下に中世以後の遺構や遺物包含層が基盤層の上に堆積している。遺構の検出は1面を近世後半以後の整地・盛土層上面にて行い、2面を基盤層上面にて行った。


10A区全景（2面、正面に欠下城址、北西から）

その結果、10A区において古代から中世の遺物を包含する沢を埋める流れを3条（04NR・05NR・10NR）と沢の東側にて土坑10基、柱穴20基を検出した。土坑の中で06SKからは、人骨と思われる骨片と土師器小皿2点が出土し、墓地の一部にあたるものと思われる。10B区においては10A区の北から流れる沢の堆積が東西に分かれることが判明し、中央部平坦面にて欠下城址側を区画する堀切が2条と土坑と柱穴約200基を確認した。堀切の溝2条はともに幅5m程の横断面逆台形のものであり、欠下城址側から外につながる陸橋と考えられる地山の削り残し部分があった。堀切の溝の時期は室町時代のものである。10C区では10A区からのびる沢の堆積物があり、中世の遺物が確認できた。

ま と め

今回の調査では、文献資料からは不明であるが、地元にて「欠下城址」とされる丘陵の北西を調査した。調査では城跡と明確にいえる資料は確認できなかったが、10B区の西丘陵上平坦面にあった勅養寺観音堂との関連がある道具瓦や勅養寺の前身である中福寺の伝承に近い古代～中世の遺構・遺物が確認できた。（蔭山誠一）



10Ab区骨が出土した土坑（東から）



10B区鎌倉時代の小皿が出土した柱穴（東から）



10B区羽釜形土師器が出土した土坑検出状況（南から）



10B区西側沢部（北西から）

キジ山古墳群・晴雲寺址

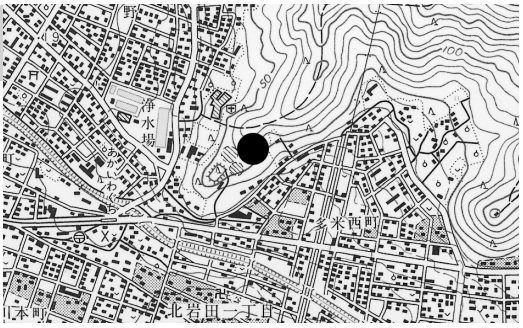
所在地　豊橋市多米町野中
（北緯34度47分22秒 東経137度26分15秒）

調査理由　愛知県水道用水供給事業

調査期間　平成22年10月～平成23年3月

調査面積　2,170㎡

担当者　鈴木正貴・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「豊橋」）

調査の経過　調査は愛知県水道用水供給事業にかかる事前調査として愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。キジ山古墳群に該当する1,130㎡（KJ10A～C区）と平成21年度の範囲確認調査で判明した晴雲寺址に該当する1,040㎡（SU10A～B区）を発掘調査した。

立地と環境　遺跡は豊橋市街地の東方に位置し、山地から南西方向に張り出す尾根の端部に立地する。その南側には朝倉川が東西方向に流れる。キジ山古墳群は総計30基以上が分布する後期～終末期の群集墳である。一方晴雲寺址は尾根筋から西側斜面にあって吉田城と城下町を見下ろす位置にある。

調査の概要

終末期古墳　KJ10A区では、終末期古墳1基を検出した。小型の横穴式石室（全長約1.7m、幅約0.7m）で胴張形の平面形をしており、床は礫が敷かれていた。石室内からの出土遺物はなく、もともと副葬品がなかった可能性が高い。石室前方斜面からは8世紀前葉とみられる須恵器杯小片などが出土しており、これらが墓前祭祀の遺物とすると、7世紀末～8世紀の終末期古墳と考える事ができる。墳丘直径は約6mである。

キジ山34号墳　KJ10B区では、キジ山34号墳の周溝を検出した。周溝からは須恵器甕小片が出土した。また古墳築造の初期段階に地山を大きく切り出して斜面地を造成していたことも判明した。

後期古墳　KJ10C区とSU10A区では南西斜面にて新たに後期古墳2基を検出した。前者は、全長約2.5m以上ある横穴式石室とそこから延びる排水溝がある。排水溝などからは須恵器フラスコ瓶、杯身、短頸壺などが破砕された状態で出土した。石室に伴う排水溝は付近の稲荷山古墳群でも確認されている。後者は晴雲寺址礎石建物南側に位置し、石室前半を中心に残存していた。供献された須恵器杯や土師器甕が出土した。

晴雲寺址　晴雲寺址は文献史料によると、宝永5年（1708）に吉田藩主牧野氏の菩提寺として創建された浄土宗御津大恩寺の末寺で、2間半×3間の観音堂などがあったことが伝えられている。建物があったとみられる平場が2つあり、上段平場（SU10A区）では一辺約5mの概ね正方形となる礎石建物とその基壇が検出された。撹乱によって礎石は大半が失われていたが史料にある観音堂の可能性が高い。遺物は18～19世紀の陶磁器が多数あり、特に仏具は遺跡の性格をよく示している。

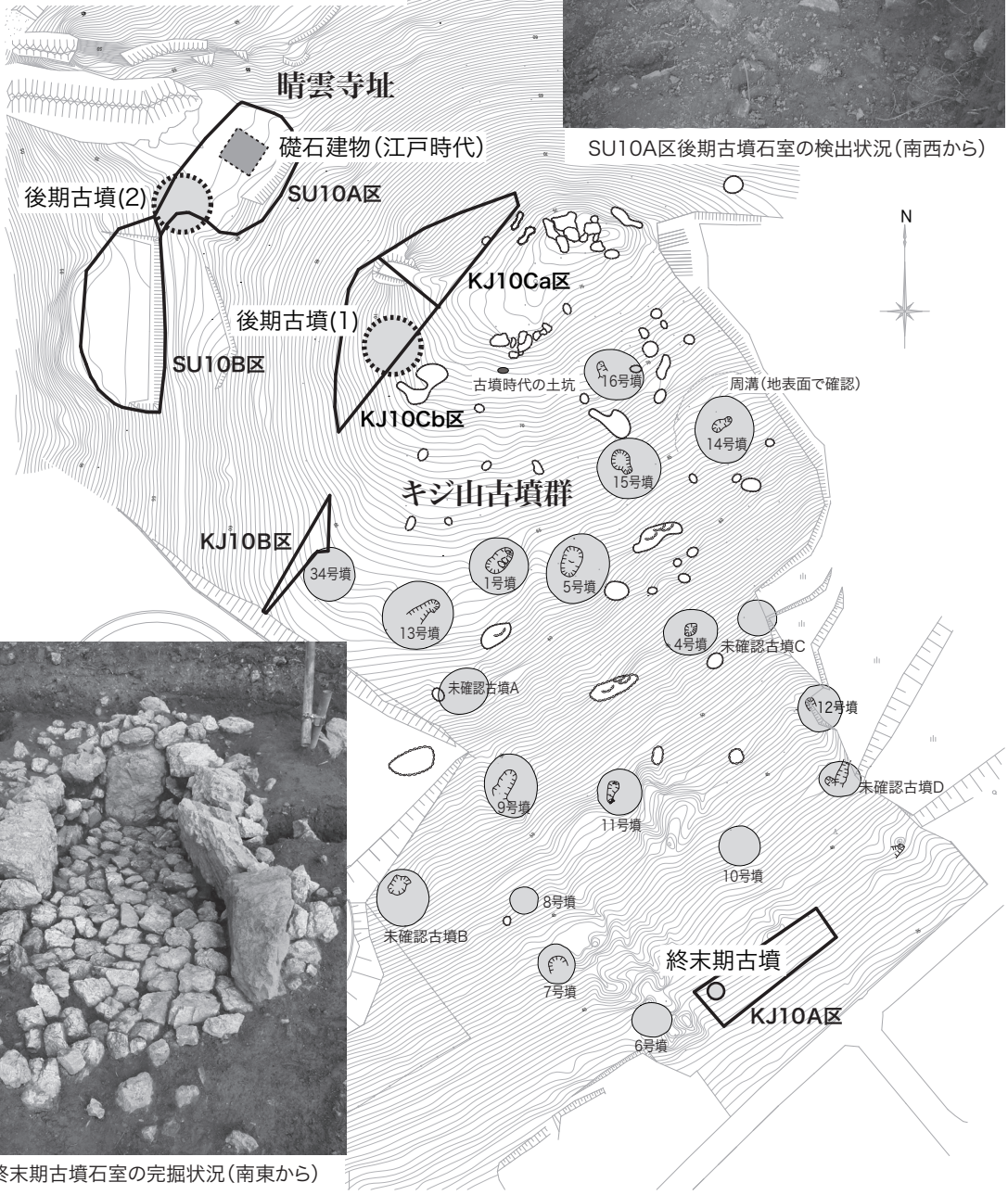
まとめ　キジ山古墳群では4基の古墳を調査し、丘陵南西斜面にも展開していることが明らかになった。また小規模な終末期古墳は面的な調査によって初めて判明することが多く、古墳群の調査方法について再考が必要であろう。一方晴雲寺址は地方における江戸時代後期の小寺院に関する新知見となった。諸史料との照合が今後の課題となる。　（永井邦仁）



SU10A区晴雲寺址礎石建物跡の検出状況（南から）



SU10A区後期古墳石室の検出状況（南西から）

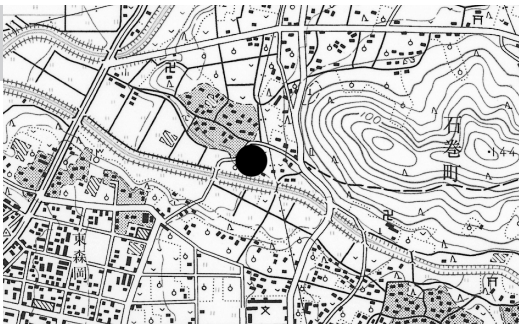


KJ10A区終末期古墳石室の完掘状況（南東から）

キジ山古墳群・晴雲寺址遺構図（1:1,500）

東屋敷（ひがしやしき）遺跡

所　在　地　豊橋市石巻本町字東屋敷、字間場
（北緯34度47分22秒 東経137度26分15秒）
調 査 理 由　道路改良工事（主）東三河環状線
調 査 期 間　平成22年5月～平成22年8月
調 査 面 積　1,310㎡
担　当　者　鈴木正貴・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「豊橋」）

調査の経過　調査は主要地方道東三河環状線道路改良事業にかかる事前調査で、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査は平成20・21年度にも実施しており、調査面積の総計は4,420㎡である。今年度は遺跡北端（10A区）、篦矢神社北側（10B区）、同東側（10C・D区）を調査した。

立地と環境　遺跡は、石巻山西麓の河岸段丘上に立地する。遺跡南端は段丘崖になっており崖下を三輪川が西流する。三輪川を挟んだ対岸の段丘上には西浦遺跡があり、弥生時代～江戸時代の遺構と遺物が検出されている。当該遺跡の北端は段丘に入り込んだ小さな谷に面しており、小谷の北側には縄文時代早期の押型文土器が出土した多り畑遺跡や中世～戦国時代が中心となる神ヶ谷遺跡がある。

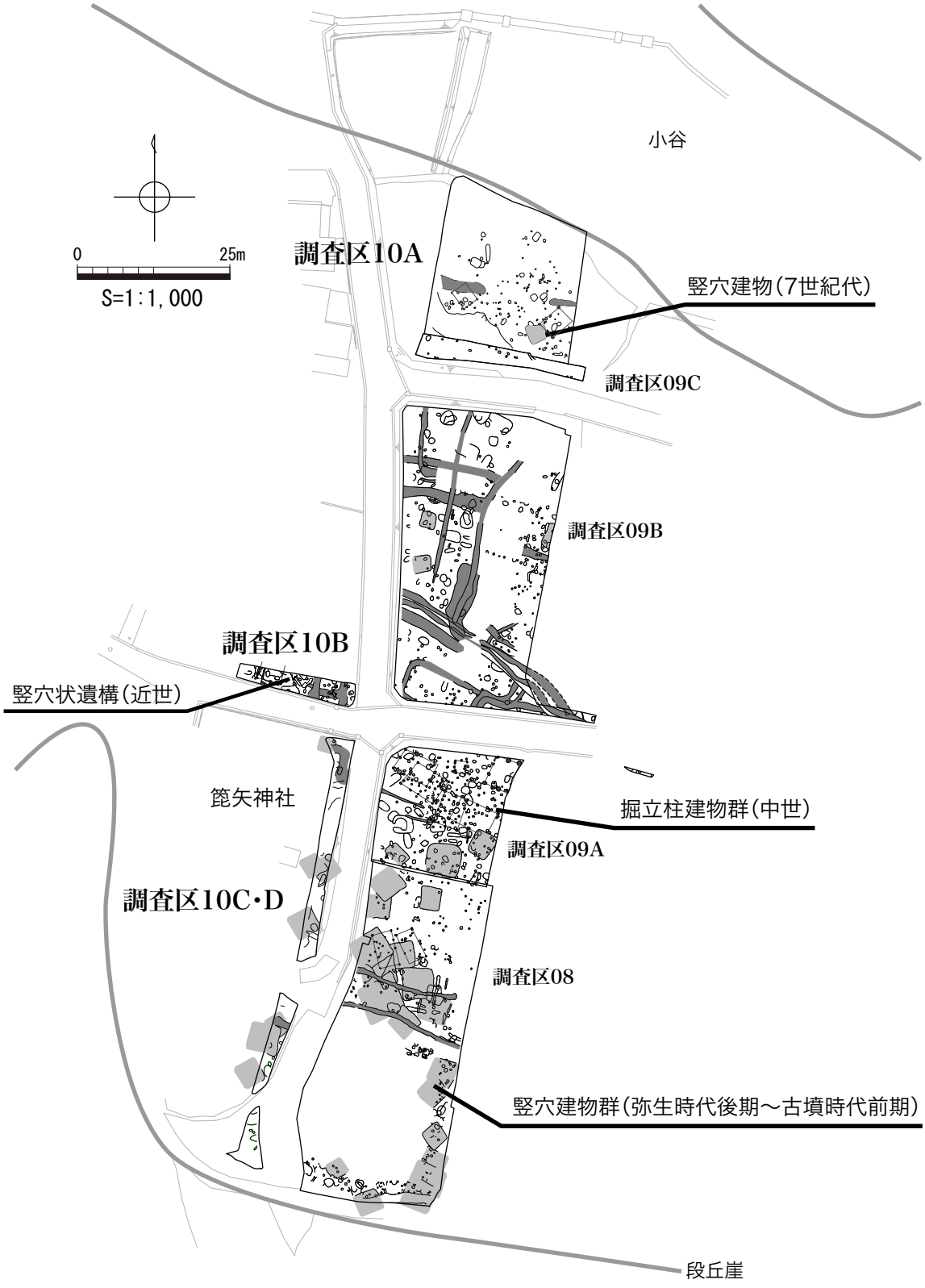
調査の概要　遺構検出は、10A・B区では地山となる礫混じり粘土層上面、10C・D区では地山層上に広がる黒ボク層上面で行った。

10A区では7世紀代の小型の竪穴建物跡（3m×2m）4棟と廃棄土坑を検出した。竪穴建物跡は全て重複関係にあり1棟が作り替えられながら継続したものと考えられる。廃棄土坑からは6世紀以降の土師器高杯脚部や須恵器が出土した。他にはピットを多数検出したが、山茶碗が出土するものがあることから中世の掘立柱建物などが想定される。調査区の北半は地山が小谷へ傾斜しており、遺構・遺物ともに希薄となる。

10B区では江戸時代前半の瀬戸美濃産陶器が出土する大型の土坑（3m以上）と一部が重複する竪穴状遺構、それらに先行する南北溝を検出した。調査区西半では掘立柱建物の一部とみられるピットを検出した。

10C・D区では平成20年度調査（08区）で検出された弥生時代後期～古墳時代前期の集落や古代以降とみられる東西溝の続きとなる遺構が検出された。前者の時期となる竪穴建物は7棟あり、硬化した貼床面も残存していたが遺物は少なかった。遺物は弥生土器と土師器の小片の他に山茶碗と土師器皿がみられた。後者は10C区東側の平成21年度調査（09A区）で検出された中世の掘立柱建物跡に関わるものであろう。

ま と め　3年次の発掘調査で、東屋敷遺跡では(1)弥生時代後期～古墳時代前期、(2)古墳時代後期、(3)平安時代～鎌倉時代、(4)江戸時代の各時期にわたる集落遺跡が確認できた。(1)は竪穴建物約30棟が遺跡南端の段丘崖面に沿って展開し、篦矢神社とその付近が中心になるであろう。(2)は調査区北端のみでみられこの時期になって初めて段丘内の小谷の開発が進んだことを示唆する。(3)は篦矢神社東側の段丘頂部の平坦面に掘立柱建物群が広がる。当該遺跡周辺は伊勢神宮の荘園である神谷御厨の推定地である。中世遺跡が点在することからも中世の面的な開発の一部とも考えられる。(4)は字東屋敷地内のみに限定的であることから、現在の東屋敷集落に繋がるものと推察される。（永井邦仁）


小谷
0
25m
S=1:1,000
調査区10A
竪穴建物(7世紀代)
調査区09C
調査区09B
調査区10B
竪穴状遺構(近世)
筥矢神社
掘立柱建物群(中世)
調査区09A
調査区10C・D
調査区08
竪穴建物群(弥生時代後期～古墳時代前期)
段丘崖

遺構全体図(1:1,000)

東下地遺跡（ひがししもぢ）

所　在　地　豊橋市石巻本町字東下地、字西下地、字日南坂
（北緯34度47分52秒 東経137度26分16秒）

調 査 理 由　道路改良工事（主）東三河環状線

調 査 期 間　平成21年5月

調 査 面 積　50㎡

担　当　者　鈴木正貴・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「豊橋」）

調査の経過　範囲確認調査は、主要地方道東三河環状線道路改良事業にかかる事前調査で、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成21年５月、調査面積は50㎡である。

立地と環境　東下地遺跡は神田川右岸の低地に立地する。標高は16.5～18.0mである。北側の河岸段丘上には弥生時代後期～古代の高井遺跡群が展開する。

調査の概要　試掘坑はT.T.1～T.T.25の25地点を設定し、遺構・遺物の有無と堆積状況の確認をおこなった。試掘坑はその内容からA～E群に分けられる。

A　群　T.T.1～6は神田川右岸堤防わきに設定した。表土（約10cm）または造成土下ですぐに直径5～15cmの中礫・大礫を主体とする礫層があらわれた。礫層上面で遺構・遺物は検出されなかった。しかしT.T.3では地表面から約190cmまで重機で掘削したところ、黒褐色粘土層があらわれ、その土層中から摩耗した土師器小片が採集された。このことから当該礫層は土師器よりも新しい時期に堆積したことが明らかとなった。

T.T.9・13では、宅地造成土下で礫層があらわれ、T.T.1～6と同様の堆積が確認できた。T.T.9では造成土内から土師器小片が出土した。

B　群　T.T.7・8・10・11では表土を約10cm除去したところ暗褐色粘質シルト層があり、その上面で遺構が検出された（検1面）。遺構は土坑状のものが中心であるが、そこから中世前期（鎌倉時代）の土師器皿・古代の須恵器が多数出土した。そして暗褐色粘質シルト層を掘り下げると、例えばT.T.8では地表面下50cmで礫層があり、その上面でも遺構や自然地形が検出されることが確認された（検2面）。なおT.T.11ではシルト層中から古代の須恵器甕片、検2面遺構内からは古墳時代の可能性がある土師器片が出土した。

T.T.12では遺構・遺物ともに検出されなかったが堆積状況からこの群に含まれる。

T.T.15では中世前期の山茶碗と土師器皿が掘削土内から出土した。

C　群　T.T.14・16・18・19・22・23・25では、地山礫層が深く潜り込んでおり、例えばT.T.19では地表面下約180cmでようやく礫層上面に達した。礫層より上位の堆積は、上が黒褐色、下が褐色の粘土に小～中礫が混じったものである。T.T.23では下の褐色粘土層上面で竪穴建物跡の可能性がある遺構を検出し、さらにその底部でピット1基を検出した。上の黒褐色粘土層が旧表土に該当するとみられる。これらのT.T.では遺物の出土は少なかったものの、窪地地形が埋没したのちに形成された遺構の展開が考えられる。

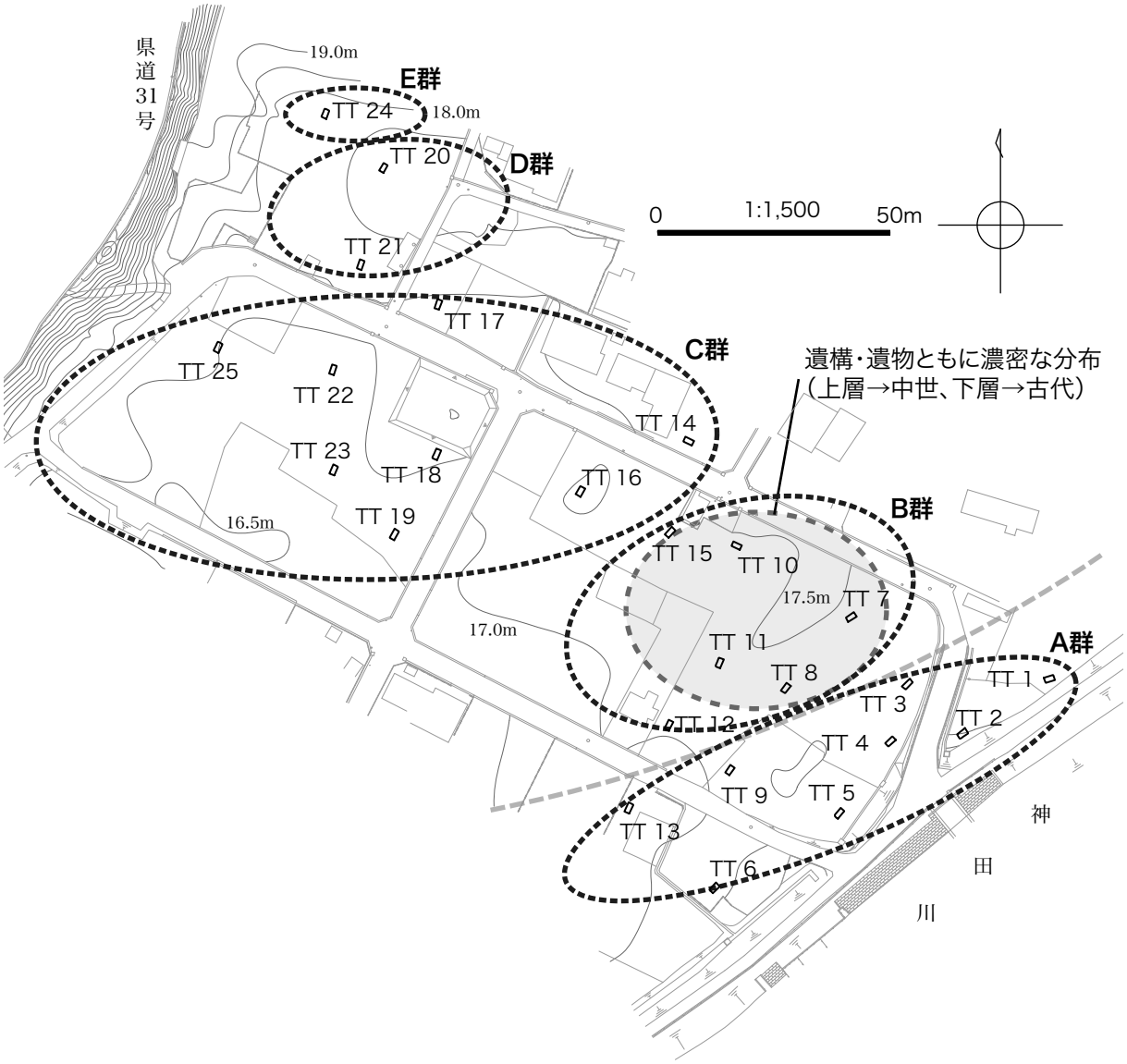
T.T.17では褐色粘土上面で遺構を検出した。同粘土層からは土師器小片が出土した。

D　群　T.T.20・21では遺構検出はできなかったが、礫層の間に粘土層が存在するなど、流路（神田川）の痕跡をうかがわせる堆積状況であった。T.T.20では礫層や粘土層から土師器小片が出土しており、この堆積が古墳時代以降に進行したと考えられる。

E　　群　T.T.24は段丘崖に最も近い地点である。地表面下約150cmで礫層に達するが、その上位粘土層で遺構が検出され土師器小片が出土した。また礫層上面でも凹凸が確認され、遺構が検出される可能性がある。

ま と め　東下地遺跡では、全ての調査地点で礫層が確認されるが、その検出深度や成因は一様ではない。特にA群T.T.の礫層は、神田川が現在の流路になりつつあった頃に形成されたものと考えられ、B～E群T.T.との間に、その端が推測される。また、D群では礫層検出深度が深いことから、神田川の旧流路がD・E群T.T.付近にあったことが推測される。ただしそれも埋没が進み、その上層で中世段階の遺構が形成されたようである。

このことから、もともとの微高地でありかつ神田川現流路に影響を受けていないB群T.T.が最も遺構・遺物が濃密に展開する地点として理解される。また、T.T.11・12西方の柿畑は調査できなかったものの神田川と平行に同様な堆積状況が展開していることが推察されることから、遺構・遺物の検出が予想される。　（永井邦仁）



調査区配置図（1:1,500）